ASIA
KAKEHASHI
PROJECT







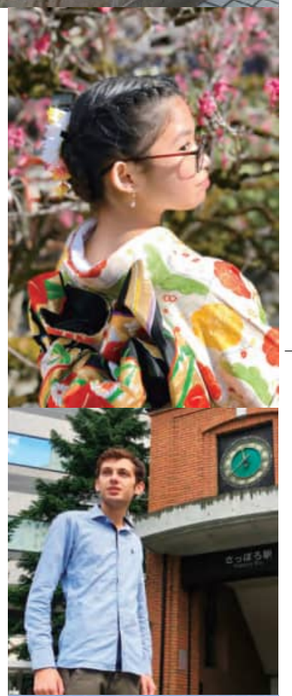


アジア高校生

架け橋プロジェクト
中間報告書

2018年度（第1期）〜2021年度（第4期）

文部科学省補助事業
実施団体 公益財団法人AFS日本協会





AFS Intercultural Programs

公益財団法人AFS日本協会 www.afs.or.jp/
（UNESCOオフィシャルパートナー）

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-18-16　虎ノ門菅井ビル6F

asiakakehashi@afs.or.jp

新型コロナウイルス感染症対策のため、事務所は在宅勤務体制となっております。お問い合わせは、メールもしくは右記二次元コードからお願いします。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

AFSは「持続可能な開発目標（SDGs）」をサポートします。

AFSは、国連が2030年に向けて採択した「持続可能な開発目標（SDGs）・世界を変えるための17の目標」のうち、目標4と目標16の実現に向けて行動しています。











アジア諸国で日本語を学ぶ意欲のある

優秀な高校生を日本全国の高校に招へいし、

日本の高校生と共に学び合い、

国際交流を深める文部科学省補助事業

「アジア高校生架け橋プロジェクト」。

2018年度（第1期）から2021年度（第4期）までの

活動をまとめた中間報告書をお届けします。

留学生の成長や、受け入れによる

日本の学校、寮・家族や地域への影響、

活動を振り返るデータなどから、

プロジェクトのインパクトを感じていただければと思います。

目 次

ごあいさつ 04
大使からのメッセージ 05
プロジェクト概要 06
プロジェクト受け入れ実績 08
来日中・帰国後の実績 10
新聞記事が伝えた全国の「架け橋体験」 12
各国組織の代表者が語るプロジェクトの魅力 14
選考から帰国まで 16
サポート体制と安全対策 18
ASIA KAKEHASHI “Senpai” ネットワーク 19
オンラインで「心が動く」交流を ー“もうひとつの”アジア架け橋ー 20
留学生の成長 22
留学生の1日 28
クーデターで人生が変わったミャンマー生 日本の大学に「桜咲く」 29
受け入れのインパクト　日本の高校生編 30
受け入れのインパクト　ホストファミリー編 32
受け入れのインパクト　寮編 36
受け入れのインパクト　学校編 38
次世代の国際交流を刺激する「小松モデル」 43
高校生留学を支えるボランティア 44
キーワードで考える　アジア架け橋 48
データで見るASIA KAKEHASHI ー2018年度（第1期）~2020年度（第3期）までの調査結果ー 50
都道府県別受け入れ校数及び人数一覧 60
架け橋アルバム 61
修了生からのメッセージ 64












ごあいさつ



文部科学省総合教育政策局国際教育課長
石田 善顕

コミュニケーション能力と異文化理解の精神を育む

「アジア高校生架け橋プロジェクト」では、平成30年度から令和3年度に至るまで、アジア各国・地域727名の高校生が最大8か月間、ホームステイや寮生活をしながら、日本の高校生と共に学び合い、交流を深めてきました。本事業が公益財団法人AFS日本協会の職員やボランティアの皆様、さらには、ホストスクールやホストファミリーの皆様の多大なご協力の下、実施されていることについて、厚くお礼申し上げます。本事業は、外国人高校生の日本理解の促進のみならず、日本人高校生のコミュニケーション能力の向上や異文化理解の精神の涵養にも極めて有意義であると考えます。来年度も、本事業を通して、日本とアジア諸国の高校間ネットワークの構築や、互いの国に精通したリーダー、架け橋となる人材育成がなされることを祈念しています。関係の皆様におかれましては、引き続き、ご協力を賜りますようお願いします。

アジアの次世代リーダーとの異文化理解教育で世界の平和に貢献したい

「冤罪をなくす弁護士になりたい」「紛争のない世界にするため国連で働きたい」「貧困に苦しむ子どもたちを救うNGOを創りたい」「日本語で小説を書きたい」「医者になって貧しい人を救いたい」「起業して国民を幸せにしたい」。経済的な理由などで留学は遠い夢と諦めてきたアジアの高校生に光をあてる日本政府奨学金「アジア高校生架け橋プロジェクト」は、画期的なプログラムです。ホームステイや学校の寮で同世代と寝食を共にして、教室やクラブ活動を通して、将来の夢を見つける彼らのひたむきな姿に一番刺激を受け、自己変革を起こしているのは日本の高校生たちです。全国各地でサポートする私たちAFS日本協会の約1,600人のボランティアも彼らの志の高さから日々学んでいます。紛争で無実の人々が次々と殺されることが日常になっている今だからこそ、彼らと一緒に平和の尊さを日本から世界に伝えたい。



公益財団法人AFS日本協会理事長
加藤 暁子



AFS国際本部 会長兼CEO
ダニエル・オブスト

アジアの多様な人々をつなぐ、先見性あるプログラム

人的交流の促進は、政府が実施できる最高の投資のひとつです。「アジア架け橋プロジェクト」は、次世代のグローバルリーダーを育成し、アジア全域で人と人とのつながりを深める、先見性あるプログラムです。AFSは、文部科学省が実施するプログラムに伴走できることを光栄に思います。私は、第1期生の修了式で、生徒の成長に立ち会う機会を得ました。すべての体験談が非常に刺激的であり、本事業がアジア全域に多大な影響を与えていると確信したのです。75年の活動を通して、AFSは、異文化体験は大きな意味があり、長期的な影響を与えることを明らかにしてきました。本事業のような交流プログラムの参加生は、同世代と比較すると、異文化に対して抵抗がなく、グローバルな問題に関心を持っており、しなやかな適応力やグローバル・コンピテンスの向上において、平均レベルが高いことが示されています。アジアの多様な人々の間に橋を架ける方法として、青少年の交流と教育にビジョンを持って投資を行う日本政府を称賛します。

大使からのメッセージ



駐日インド特命全権大使
サンジェイ・クマール・ヴァルマ

両国の関係強化における「架け橋」に

2つの社会をつなぐ教育交流は異文化間の強い結びつきや相手国の生活様式から学びたいという願望を体現しており、その根底には人的交流を深めるという目的があります。インドと日本は密接な関係で結ばれており、両国は文化的・精神的な絆を共有しています。印日関係は「特別戦略的グローバルパートナーシップ」に格上げされました。学術交流、学生・教員間の交流、両国の言語の推進、教育機会に対する意識向上を含む教育分野における協力は、両国関係の強化に大きく貢献してきました。「アジア高校生架け橋プロジェクト」は文字通り両国間の架け橋となるもので、文部科学省がインドの高校生を日本に招へいし、短い滞在を通じて彼らに日本の強みである基礎的能力や技能に触れてもらうという素晴らしい取り組みです。この2年間、コロナ禍という困難な状況にもかかわらず、このプロジェクトの実施機関であるAFSが約80名以上のインド人高校生を日本に招き交流の勢いを維持してきたことは、喜ばしいことです。主催者の皆様の御成功をお祈りするとともに、2022年6月に最後のグループとなる5期生のインド人高校生が来日するのを楽しみにしています。

高校留学は自国や国際社会のリーダーへの登竜門

「アジア高校生架け橋プロジェクト」に参加したアジア20か国からの留学生たちは、日本での高校生活やホストファミリーとの交流を通じて、多くの貴重な異文化体験をします。また言語は、友情と理解のための「窓」であり、お互いの理解を深めるだけでなく、言葉を理解することによって、より親近感を強めることにつながります。高校から大学院まで日本で10年以上過ごした私にとって、日本での経験は人生の視野を広げ、豊かにしてくれる素晴らしい時間でした。高校留学生が今後、自国のリーダーとして、そして国際社会における架け橋として大いに活躍することを期待しています。最後になりますが、関係者の皆様にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



駐日タイ王国特命全権大使
シントン・ラーピセートパン



柴山文部科学大臣（当時）を表敬訪問（2019年2月）

プロジェクト概要

「アジア高校生架け橋プロジェクト」は、2018年度にはじまった文部科学省補助事業で、アジア諸国で日本語を学ぶ、または学ぶ意欲のある優秀な高校生を日本全国の高校に招へいし、日本の高校生と共に学び合い、国際交流を深めるプロジェクトです。2018年度から2022年度の5年間で1,000人規模の交流を目指しています。

*公益財団法人AFS日本協会は、公募により決定した本プロジェクトの実施団体です。





Point!

- アジアの高校生を日本全国の高校に招へい
- 5年間で1,000人規模の留学生と交流
  2022年度＝約250人（2022年6月～約10か月間を予定）
- 日本各地でホームステイや寮生活をしながら、
  高校・高等専門学校に通学
- 休日には文化体験、地域交流、
  国内企業でのインターンシップ等

留学生出身地（計21か国・地域）

インド ・ インドネシア ・ 韓国 ・ カンボジア ・ スリランカ ・ タイ ・ 中国 ・ トルコ ・ ネパール
パキスタン ・ バングラデシュ ・ フィリピン ・ ブータン ・ ブルネイ ・ ベトナム ・ 香港 ・ マレーシア
ミャンマー ・ モンゴル ・ モルディブ ・ ラオス

※モルディブは2022年度に初来日

実績（2018年度～2021年度・4年間）

来日生徒数 **727人**

出身国・地域 **20**

滞在地（都道府県） **47**

受け入れ校（のべ数） **466**

年度	期間	来日生徒数	滞在地	受け入れ校
2018年度（1期生）	6か月	100人	36都道府県	69校
2019年度（2期生）	8か月	200人	37都道府県	121校
2020年度（3期生）	5か月*	178人	40都道府県	108校
2021年度（4期生）	6か月*	249人	42都道府県	168校
2022年度（5期生）	10か月	約250人	配属調整中	配属調整中

*2020年度と2021年度は、コロナ禍の影響で来日延期となったため、滞在期間が短縮されました。



＼ 期待される5つの効果 ／

1 多くの日本の高校生が、海外に行かずして教室で国際交流を経験

1クラス40人×留学生1,000人＝40,000人への効果が期待できます。

2 日本の高校生の留学意欲や国際的素養の向上

英語に自信がなくても、留学生と日常的に交流できます。



3 アジアの高校生が、日本の生きた「教育」「文化」などを体験

数学・英語・家庭・書道が人気。部活にも挑戦します。



4 日本とアジアの高校ネットワークの構築

日本と母国の高校をオンラインで結び、交流した生徒もいます。

5 互いの国に精通したリーダー、架け橋となる人材の育成

1～3期生44人が再来日。帰国後1～3年で、日本の高等教育機関に進学（全体のおよそ9.2%）。

※このほか、受け入れ校の希望により、留学生や受け入れ校同士のオンライン交流プログラムを複数実施（30校、2020年度実績）。留学生の受け入れを通じて、日本の高校生とアジア生との異文化理解教育を促進しています。

プロジェクト受け入れ実績 2018年度（第1期）〜2021年度（第4期）

＊（ ）内は2022年度来日予定人数です。



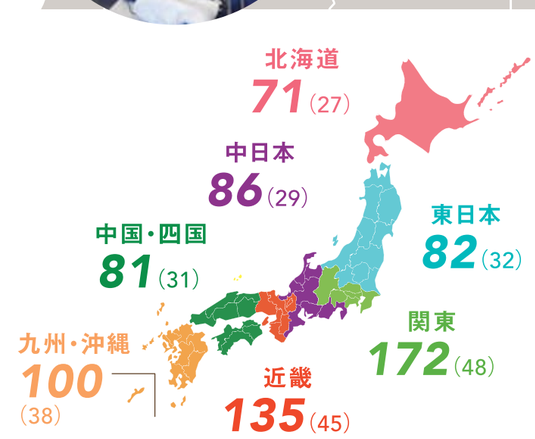












地域	インド	インドネシア	韓国	カンボジア	スリランカ	タイ	中国	トルコ	ネパール	パキスタン	バングラデシュ	フィリピン	ブータン	ブルネイ	ベトナム	香港	マレーシア	ミャンマー	モルディブ	モンゴル	ラオス	合計
北海道	9 (2)	9 (3)	4 (2)	2 (1)	0 (2)	5 (3)	7 (1)	2 (0)	1 (0)	2 (0)	2 (1)	4 (3)	2 (0)	0 (0)	3 (2)	0 (0)	9 (3)	9 (0)	- (0)	1 (2)	0 (2)	71 (27)
東日本	5 (2)	13 (4)	5 (2)	4 (1)	4 (1)	9 (2)	7 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	9 (3)	0 (1)	0 (1)	6 (2)	1 (0)	7 (4)	4 (1)	- (1)	2 (1)	6 (1)	82 (32)
関東	12 (5)	24 (7)	9 (2)	7 (3)	7 (2)	10 (4)	8 (2)	0 (1)	2 (1)	4 (1)	4 (0)	19 (5)	1 (0)	0 (0)	11 (4)	2 (0)	19 (6)	12 (1)	- (0)	12 (2)	9 (2)	172 (48)
中日本	8 (3)	12 (4)	3 (1)	2 (2)	2 (2)	11 (2)	4 (1)	2 (0)	0 (1)	0 (1)	2 (1)	10 (3)	1 (0)	1 (0)	8 (2)	1 (0)	8 (3)	5 (0)	- (1)	2 (1)	4 (1)	86 (29)
近畿	13 (4)	14 (6)	8 (2)	11 (3)	4 (2)	12 (4)	2 (2)	3 (1)	3 (0)	2 (1)	2 (1)	10 (4)	1 (0)	1 (0)	9 (4)	0 (0)	20 (6)	8 (1)	- (0)	6 (2)	6 (2)	135 (45)
中国・四国	4 (2)	11 (4)	1 (2)	6 (1)	8 (2)	4 (4)	3 (1)	2 (1)	2 (0)	3 (0)	2 (0)	5 (4)	0 (1)	0 (0)	8 (2)	0 (1)	8 (3)	4 (1)	- (0)	7 (1)	3 (1)	81 (31)
九州・沖縄	11 (3)	13 (5)	6 (2)	7 (2)	5 (2)	11 (3)	0 (2)	0 (1)	0 (1)	4 (1)	3 (1)	11 (3)	0 (1)	1 (0)	7 (3)	0 (1)	11 (3)	4 (1)	- (0)	2 (1)	4 (2)	100 (38)
受け入れ合計数	62 (21)	96 (33)	36 (13)	39(13)	30 (13)	62 (22)	31 (10)	9 (5)	8 (4)	15 (5)	15 (5)	68 (25)	5 (3)	3 (1)	52 (19)	4 (2)	82 (28)	46 (5)	- (2)	32 (10)	32 (11)	727 (250)

＊（ ）内は2022年度来日予定人数です。

来日中・帰国後の実績

「アジア高校生架け橋プロジェクト」参加留学生の日本語学習歴や習熟度は、初心者から上級者まで個人差があり、来日前は半数以上が初心者です。来日中にぐんぐんと語学力をのばし、コンテスト入賞や、日本の大学進学を果たす留学生がいます。
主な活動実績は、公式Instagram @asia_kakehashiで随時紹介しています。

受賞 スピーチコンテスト／作文コンクールほか

1期生

ソ・ユカ（中国、茗溪学園高等学校）**「私たちは親友になれるかな」**
「第28回外国人による日本語スピーチコンテスト」茨城県知事賞／若人賞（主催:茨城県国際交流協会）



ヒーン・ペンチャン（カンボジア、八戸聖ウルスラ学院高等学校）**「日本語おもしろい」**
「第28回外国人による日本語スピーチコンテスト」（主催:盛岡ゾンタクラブ）／エフエム岩手賞

パンハヴォワン・レス（カンボジア、奈良県立高取国際高等学校）**「言語と世界観」**
「第28回奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会」（主催:奈良県国際教育研究協議会）／会長賞

2期生

テルゲル・ドルジスレン（モンゴル、サビエル高等学校）
①最優秀賞「天使の夢」
「第30回外国人による日本語スピーチコンテスト」（主催:日本国際連合協会山口県本部）

②優勝「私は日本の文字に興味を持っています」
「第一回日本語作文コンクール」（主催:モンゴル国営モンツァメ通信社）

アビヨガ・プラタマ（インドネシア、奈良県立高取国際高等学校）
会長賞「第29回奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会」（主催:奈良県国際教育研究協議会）



ヒラン・カルナーラトナー（スリランカ、英数学館高等学校）
優秀賞「第19回外国人による日本語スピーチ大会」
（主催:国際交流ボランティア・フィーラス華、尾道市国際交流推進協議会）

プラナブ・チョウドリー（インド、大阪府立北野高等学校）
優秀賞「私は日本でインドを見つけた」
「第27回高校留学生の日本語による体験発表会」（主催:大阪府高等学校国際教育研究会）

ドアン・ミン・イエン（ベトナム、岐阜県立大垣北高等学校、帰国後の参加）
優勝「2020-2021ホーチミン市優秀学生コンテスト」日本語部門

3期生

ギアン・ケネス・カスリヤノ（フィリピン、愛媛大学附属高等学校）**「日本留学までの道のり」**
「第17回留学生日本語スピーチコンテストin愛媛2020」（主催:愛媛県留学生等交流推進会）／特別賞

グエン・ホン・アン（ベトナム、育英西高等学校、帰国後の参加）
「第7回法政大学日本語スピーチコンテスト」高校部門　選抜参加者

4期生

ヤン・シンタオ（中国、札幌静修高等学校）**「初めての友達」**
「日本語スピーチコンテスト in SIU」（札幌国際大学主催）／特別賞

イアン・カルロ・コルテス（フィリピン、岩田高等学校）**「日本語を学んで見えてきたもの」**
「福澤諭吉記念第60回全国高等学校弁論大会」（主催:中津市）／招待弁士・記念表彰

ラセンドリヤ・アラダナ・アジ（インドネシア、桜井高等学校）**「めっちゃおもろいやん、関西弁」**
「第30回奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会」／会長賞

グエン・ハ・アン（ベトナム、神村学園高等部）
「第27回外国人による日本語スピーチコンテスト」（主催:鹿児島県国際交流協会）／奨励賞

ニーリザー・ソワーン・モム（カンボジア、宮崎県立本庄高等学校）**「宮崎弁について」**
「外国人住民による日本語スピーチコンテスト」（主催:宮崎県国際交流協会）／学生の部 オーディエンス賞



その他

大会受賞・発表

サムテアデヴィ・ニェクサムカン（カンボジア、サビエル高等学校）2期生
第15回お坊さんめぐり大会 優勝（主催:山陽小野田かるた協会）

プラナブ・チョウドリー（インド、大阪府立北野高等学校）
即興型ディベート全国大会校内セクション会　ベストスピーカー賞／ベストPOI（Point of information）賞

他団体との協働

「アジア高校生国際会議」
（主催:名古屋大学教育学部附属中・高等学校、2019年8月18日～19日）
Global Conference for SDGs among Asian High school students
2期生第一到着グループ113人



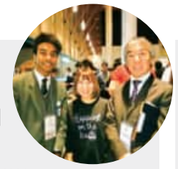
スーパーグローバルハイスクール（SGH）全国高校生フォーラム
（主催:文部科学省／2018年度、2019年度）

「アジア・ハイスクール・サミット」
（主催:日本の次世代リーダー養成塾）2020年度、2021年度　来日前の3期生・4期生が参加

オンライン交流会：NPO法人キッズドア＝3期生15人　　株式会社三菱UFJ銀行＝4期生

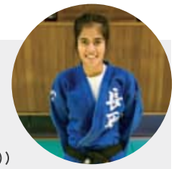


ボランティア



「軽井沢国際選手権カーリング大会2019」
通訳ボランティア
タルーシャ（スリランカ、2期生／佐久長聖高等学校））
皆がキビキビ働き、定刻通りにプログラムが進む。食べ物の小さな屑までもきれいに片付ける。国際大会の運営における日本の組織力に驚きました。

部活動



空手で夢の黒帯を取得
シュルティ（インド、2期生／佐久長聖高等学校））
母国で空手を習っていました。日本の高校の空手部で練習し、顧問の先生や仲間の協力を得て黒帯を取得できました。

帰国後の進学（日本や海外留学関連の判明分）

○日本の大学・専門学校への入学

岩手大学／大阪大学※／岡山大学※／九州大学※／京都外国語大学／神戸大学※／札幌国際大学／同志社大学／東洋大学／名古屋工業大学／南山大学／北星学園大学／一橋大学※／広島女学院大学／福岡女子大学／横浜市立大学／立命館大学※／立命館アジア太平洋大学（APU）／早稲田大学／大原簿記法律観光専門学校金沢校／関西語言学院／東放学園映画専門学校※／東洋美術学校※／日本デザイナー学院※／文化外国語専門学校※／メロス言語学院

※日本政府国費外国人留学生または日本政府奨学金留学生

○インターンシップ

株式会社JELLYFISH（東京都）、在カンボジア日本国大使館

○母国の大学・専門学校での日本語専攻

カトリック女子大学日本語日本文化専攻（韓国）／国立インドネシア大学日本語学部／ラオス国立大学文学部日本語学科／帝京マレーシア日本語学院 ／王立プノンペン大学外国語学部日本語学科（カンボジア）／国立キングモンクット工科大学ラーカバン校 教養学部日本語学科（タイ）／国立コンケン大学教育学部日本語教育課程（タイ）／国家大学日本語専攻 （ベトナム）／たくみ日本語学校 （カンボジア）



○海外留学（母国以外）

清華大学（中国）／南華大学（台湾）／Minerva University（アメリカ）／Centennial College of Applied Arts and Technology（カナダ）／IUT de Saint Étienne（フランス）／Swarthmore College（アメリカ）／University of Technology Sydney（オーストラリア）／ Frankfurt School of Finance and Management（ドイツ）／Union College（アメリカ）／Hacettepe University（トルコ）／Moscow State University of Civil Engineering（ロシア）／Monash University（オーストラリア）／UWC Dilijan（アルメニア）

新聞記事が伝えた全国の「架け橋体験」

留学生は世界を映す鏡として、学校や地域に異文化体験をもたらします。
全国各地の新聞に掲載された42本の記事から、5つの「架け橋体験」を紹介します。



英検準1級に合格した（左から）横井琳香さん、湊真帆さん、畠山斗亜さん、奥中健伍さん

静内高生4人 英検準1級合格

「国際的に活躍できる人材に」

【新ひだか】静内高3年生の4人が、大学中級程度とされる英検準1級に合格した。同校で1年間に複数の合格者が出るのは初めて。留学生の受け入れなどを契機に学校全体で英語学習の機運が高まったことから、好結果に結びついたという。4人は「将来は国際的に活躍できる人材になりたい」と夢を語っている。（横田遥）

準1級に合格したのは、難関大学への進学を目指す「特進クラス」の横井琳香さん(18)、湊真帆さん(17)、畠山斗亜さん(17)、奥中健伍さん(18)。4人は7月に筆記とリスニング、8月に面接形式のスピーキングのテストを受け、合格した。同校での準1級取得は2017、18年度にそれぞれ1人が合格して以来。

同クラスでは昨年から、英検取得の学習に励み、コロナ禍で休校が続く中でも、友達同士で勉強方法を相談したり、励まし合ったりしてきたという。担任で英語科の島田民男教諭(55)は「準1級の合格率は9%ほどしかなく、自身のクラスから4人の合格者が出るのは初めて」と驚いている。

同校にはアイルランド人の英語指導助手がいるのに加え、一昨年から英語を話すマレーシアなどの高校生の留学を受け入れ、生徒が英語による交流を経験している。湊さんは昨年、民間団体が主催するベラルーシへの友好派遣団に加わり「英語が分からない場面が多く、もっと勉強したいと思った」と言う。

「英語を話すのが楽しい」と口をそろえる4人。それぞれ大学進学を希望しており、将来については「留学をしたい」（横井さん）、「看護師になって医療の届かない外国の子供を支援したい」（湊さん）、「国際問題を解決したい」（畠山さん）、「海外の人に日本の魅力を伝えたい」（奥中さん）などさまざまな目標を持つ。島田教諭は「指示されたからではなく、みんな自分で目標を持って生き生きと勉強している。将来が楽しみ」と目を細めた。

教育効果
2020年10月1日 北海道新聞
北海道新聞社提供

おいしいブータン知って

北摂三田高 留学生が料理教室

「幸せの国」と呼ばれるヒマラヤの山国ブータンから県立北摂三田高校（三田市）に留学しているリンジン・タマンさん(17)が1月31日、生徒の保護者らを対象に母国の郷土料理をつくる料理教室を同校で開き、交流の輪を広げた。

文部科学省所管の「アジア高校生架け橋プロジェクト」による招聘で、2月中旬まで滞在する。

「ショウガはみじん切り」「ガラムマサラを入れます」……。タマンさんは日本語を交えてポイントを伝えた。作るのはキノコにチーズを絡めた料理、キャベツがふんだんに入ったカレー。ジャガイモやトマトなど素材は多彩だ。香辛料を効果的に使い、香ばしい匂いがたちこめた。

出来上がった料理を食べた参加者から「家庭でも作りたい」との声があり、その一人、渡辺早智子さんは「ブータンの食文化を学びたいと思って参加した。勉強になった」と話す。

ブータンの文化の「大使」を自任するタマンさんは「喜んでもらえて良かった」と話し、残り少ない滞在でも「ブータンのことをもっと伝えたい」と目を輝かせた。（藤井匠）



ブータンの料理の作り方を伝えるリンジン・タマンさん（左から3人目）＝1月31日、三田市狭間が丘1丁目

文化交流
2019年2月2日 朝日新聞
朝日新聞社提供

子どもたちの意見

開眼体験

那覇国際高2年　アイシャ・ハナ・エメル

私はアイシャ・ハナでマレーシアからの留学生です。憧れていた日本に来ることができるようです。現在、那覇国際高校に通学しています。皆とても親切で、時々意思疎通に苦労しますが、お互いに理解しようと頑張っています。来る前は不安でしたが、現地で実際生活することでより自然に言語を学べたと思います。また、友人たちが私のおかげで英語が上達したと言ってくれるのもうれしいです。

学校では、さまざまな日本文化を学びました。特に書道と茶道は日本文化の美と優雅さを表しており、それぞれの所作の意味を学ぶのも楽しいです。また、「組踊」も鑑賞しました。セリフを理解するのはほとんどできませんでしたが、内容は理解でき、芸能は世界共通の言語だと思いました。

沖縄での経験は私の視野を広げ、物事に対する理解を深め、また自分自身を見つめ直すよい機会になりました。この一生忘れることのない大切な経験を母国に帰っても生かしていきたいです。ホストファミリー、学校の友達、先生方、その他多くの私を支えてくれた皆さんに感謝しています。いつの日かぜひ沖縄に戻ってきます。

投稿
2022年3月3日 琉球新報
琉球新報社提供

北陸中日新聞　2020年（令和2年）12月12日（土曜日）

7ヵ月遅れ つながる架け橋

小松市立高にスリランカの留学生



美術館で竹の絵を鑑賞するシェローミ・パーラミさん㊧と八十山和代さん＝小松市村松町で

夢は外交官 日本文化学ぶ

スリランカ人のシェローミ・パーラミさん㊧が、外交官を夢見ながら小松市立高校に留学している。新型コロナウイルス禍にあって、今春からの留学が七カ月間も延期され、さらに留学生の入国制限が解除され、ようやく入国できた後も二週間、隔離された。小松市のホストファミリー宅から市立高に通い始めて、ちょうど二カ月。今は市内観光を楽しみながら、箸など日本文化に触れ、交流を深めている。（長屋文太）

シェローミさんは高校生の交換留学を支援する「AFS日本協会小松支部」の協力で来日した。小松市諸町のホストファミリー・細川尚代さん宅で、ホームステイしながら、来年三月まで小松市立高校に通う。

シェローミさんのお母さんはNHK連続テレビ小説「おしん」のファン。当初は日本に興味はなかったシェローミさんだが、高校の授業で日本語を学んだ。

優秀なアジア人留学生を日本に招く文部科学省のプログラム「アジア高校生架け橋プロジェクト」に応募。スリランカでは二百人が試験を受け、面接や筆記で八人のみが選ばれ、シェローミさんはその一人。三月末に来日予定だったが、新型コロナ拡大で日本政府は外国人の入国を制限。「一度は涙を流した」と話す。

制限が解除され、十月二十九日、ようやく来日。入生で初めて飛行機に乗り、成田空港に到着した。それだけに日本に来られ、ほっとした。「成田に着いてすぐお母さんに電話した。うれしかった。」スリランカで一年間勉強し、彼ちょうな日本語を話す。近くのホテルで二週間の隔離を経て、十一月十四日、やっと小松市に着いた。空港近くのホテル滞在中は、ほとんど部屋を出ず、オンラインで留学のオリエンテーションを受けた。

この一カ月は週末や放課後、細川さんと居宅等の市中心部の町家キャラリー・松雲堂など市内の寺や文化施設を回っている。十日には小松支部の大畑清三支部長らと、同市村松町の八十山雅子・和代姉妹の大畑宅で着物の着付けを体験した。ファッションショーではインドネシア、タイ、カンボジア、ベトナム、マレーシア、モンゴルからの留学生ら9人が、それぞれの民族服を着て登場。その衣装を自国で着る場面、生地や色、模様や飾りなどについての説明もあり、関心を集めていた。

フォトコンテストの表彰式では、福重委員長が入賞者・団体に表彰状を手渡した。市民ときめきコンサート、ウオーターアートパフォーマンス、人形劇まつりなども行われ、家族連れらが楽しんだ。

フォトコンテストの入賞者は次の通り。（敬称略）

〈家族部門〉▽ベストスマイル大賞＝田中京子▽ベストスマイル賞＝鳴田千里▽スマイル賞＝原田裕次郎

〈読み聞かせ部門〉▽ベストスマイル大賞＝小野田小百合幼稚園▽ベストスマイル賞＝埴生幼稚園

母国紹介
2020年12月12日 北陸中日新聞
中日新聞社提供

宇部日報　2021年（令和3年）11月29日 月曜日

留学生が民族衣装披露

中央図書館フェス、多彩なイベント

図書館フェスティバルは27、28日、山陽小野田市中央図書館で開かれた。サピエル高の留学生による民族衣装のファッションショーなどが実施され、来館者を引き付けた。絵本でのフォトコンテストの表彰式も行われた。同フェスティバル実行委員会（福重礼代委員長）主催。



民族衣装ファッションショーに参加した留学生たち（中央図書館で）

今年の同フェスティバルは、密になるのを防ぐため、11月をフェスティバル月間として開催。各種イベントを分散して実施し、最後の週末となった2日間も多彩な事が繰り広げられた。

ファッションショーではインドネシア、タイ、カンボジア、ベトナム、マレーシア、モンゴルからの留学生9人が、それぞれの民族服を着て登場。その衣装を自国で着る場面、生地や色、模様や飾りなどについての説明もあり、関心を集めていた。

フォトコンテストの表彰式では、福重委員長が入賞者・団体に表彰状を手渡した。市民ときめきコンサート、ウオーターアートパフォーマンス、人形劇まつりなども行われ、家族連れらが楽しんだ。

フォトコンテストの入賞者は次の通り。（敬称略）

〈家族部門〉▽ベストスマイル大賞＝田中京子▽ベストスマイル賞＝鳴田千里▽スマイル賞＝原田裕次郎

〈読み聞かせ部門〉▽ベストスマイル大賞＝小野田小百合幼稚園▽ベストスマイル賞＝埴生幼稚園

地域交流
2021年11月29日 宇部日報 山陽小野田版
宇部日報社提供

Voice of Kakehashi Partners

スプートニク インターナショナル スリランカ オーガナイゼーション（SISLO）理事長
エシャンタ・アーリヤダーサ（PhD）

両国のために活躍する人材育成に

日本に憧れ、日本語を学ぶ優秀な高校生に、日本留学の機会が与えられる「アジア高校生架け橋プロジェクト」は、経済的に豊かではない家庭が多いスリランカでは、大きな希望です。本プロジェクトを通じ、日本とスリランカ両国の高校生が、文化的な相違を認めあい、多様性を尊重するというまたとない交流の機会を得られます。高校生という人生の若い時期に経験することは、人格形成において多大な影響を及ぼします。本プログラムがもたらすよき影響力は、日本とスリランカのために活躍してくれる人材を育成することにつながることでしょう。過去4年間に選抜された生徒は、帰国後も学業や課外活動において優秀な成績を残しています。将来のことも考慮すると、是非とも本プログラムを今後も継続していただきたいと思います。



トルコ文化財団／AFSトルコ 事務局長
デルヤ・コミトグル・カプラン

多様な意見を尊重する力を

近年、トルコの学生たちの間では、日本語学習に対する意欲が非常に高まっています。このプロジェクトは、トルコの高校生に日本文化を学ぶ機会だけでなく、自国文化を再認識し、多様な意見を受け止め、尊重する力を身につける機会を与えてくれます。多くの経験を通して、彼らがアジアと日本をつなぐ未来の架け橋となるよう、期待しています。

AFSフィリピン 理事長
ラヒーマ・グエラ

異文化学習の機会をフィリピンの高校生に広げる意義

AFSフィリピンは、2018年度から現在まで70名近くのフィリピン人高校生を、日本に派遣することができ、生徒たちは日本の文化や言語に関する知識だけでなく、学業や将来の職業選択における目標設定においても、極めて重要なグローバル・コンピテンスを身につけることができました。帰国後も、同窓会組織を立ち上げ、毎年200人以上の高校生に向けて日本での文化交流の経験から得たものを、同世代に伝えているのです。アジア架け橋の修了生は、サービスラーニングや地域ごとのプロジェクトを展開するなど、多方面で活躍しています。
フィリピン全土の高校生に素晴らしい機会を与えてくださった日本政府とAFSに深く感謝します。今後も、フィリピンの高校生に異文化学習の機会を提供するために、皆様との協力関係を続けられるようにと願っています。

各国組織の代表者が語るプロジェクトの魅力



AFS香港 前エグゼクティブ・ディレクター
インバート・ファング

若者が育む絆が、明日のアジアにつながる

架け橋プロジェクトが、アジアの若者の間に深い絆を育み、明日のアジアのリーダーの間で緊密に協力していく一助となることを願っています。香港の若者たちが、日本の文化だけでなく、アジアの同世代の若者たちのさまざまな文化を理解する機会を得られることを有意義に思います。このプロジェクトは、地域の未来にとって、非常にインパクトのある重要な取り組みであることは間違いのないことです。

AFSインドネシア 前事務局長
ニナ・ナスション

「ひとつのアジア」を達成するために

インドネシアの若者がアジア各国の高校生と絆を深め、相互理解、尊重、友情を育む架け橋となる素晴らしい機会です。架け橋奨学生は将来のリーダーとなります。さらに、この舞台は、「ひとつのアジア」という私たちの目標達成に向けて、ネットワークを広げ、前進することができるのです。この素晴らしいプログラムが5年以上続くことを願っています。

留学生の募集・選考、研修、保護者のサポートを担う派遣組織の代表者たちが、プロジェクトの魅力を語ってくれました。

AFSタイ 前事務局長
チラワタナ・チャローパンタラポン

アジアに強い絆を築き、広げていく

AFSタイが、アジア架け橋プロジェクトという素晴らしい旅に参加できたことは、大変光栄なことです。パンデミックは、私たち全員に影響を与えるものでしたが、AFS精神のおかげで、何ら障害を感じることなく、むしろ生涯学習の機会と捉えることができました。アジア架け橋プロジェクトの事業期間である5年を通して、CLVT*4か国の参加者は、本プロジェクトの最終目標―アジア諸国間を強い絆で結び、関係を構築し、広げることを実現してきました。彼らは、自分自身のためだけでなく、母国にも多くのインパクトを与えてきました。カンボジア、ベトナム、ラオス、ミャンマー、タイの修了生は、このプロジェクトに参加したことで、隣国の多様性に気づき、それを受け入れるようになりました。彼らは、今でも連絡を取り合うほどの親しい友人となっています。

*カンボジア、ラオス、ベトナム、タイ。AFSタイは、タイ国内とともにカンボジア、ラオス、ベトナムにおいて、各国日本大使館の協力を得ながら生徒の選考・派遣を担当しています（2018年度は、ミャンマーも担当）。

AFSモンゴル 事務局長
B・エンヒジン

未来のグローバル市民を育成する、インパクトある事業

モンゴルを代表して「アジア架け橋プロジェクト」に参加していることを大変光栄に思い、日本の文部科学省、そしてAFS日本協会に感謝の意を表します。このプログラムは、モンゴルの若者が日本文化に適応し、他のアジア諸国の文化から学ぶことによって、特に自己表現力、コミュニケーション力、自立心を養い、向上させるのに役立っていると考えています。彼らは、よりオープンマインドになり、豊富な経験と知識を得ることによって、将来、学生コミュニティを刺激し、リードする役割を担う、キーパーソンとなることでしょう。私たちは、このプログラムが年々進化すること、未来のグローバル市民にとって多大な意義とインパクトをもたらすことを期待しています。

AFS中国 前事務局長
ヤン・リー

アジアの高校生に、真の架け橋を提供

「アジア“架け橋”プロジェクト」は、アジアの高校生が日本社会に根ざし、日本の生活とつながるための、真の架け橋を提供しました。このプロジェクトは、参加者が日本文化についてより深く理解し、競争力のあるグローバル市民になるための一助となります。今後も、より多くの優秀な若者にこの素晴らしいプログラムが提供され、異文化交流の魅力を味わってもらえることを願っています。

AFSインド 前事務局長
ディヴィヤ・アローラ

持続可能でより良い明日を

皆で力を合わせれば、世界を変えられます。私たちが力を結集し、ボランティア活動などを通して社会によりよいインパクトを与えるアクションを起こしたり、活動的なグローバル市民を育てることができます。その決意を新たにする時、変化は起きるのです。「架け橋プロジェクト」によって、生徒達はとてつもなく大きな価値を、グローバル市民になるための力・能力や知識を、授かることができます。本プロジェクトによって、アジアの国々の絆が育まれ、持続可能でより良い明日を、私たち全員が永遠の友情を築くことができるよう願っています。

写真：1期生の修了式に参加するために来日した各国代表がAFS日本協会の事務局に集合。1年目の事業成果を確認しあい、5年間の事業を成功させるために、入念な打ち合わせを行いました。

選考から帰国まで



来日6〜7か月前

01 募集

文部科学省・外務省と協議の上、各国の定員を決定。各国のAFS事務所・協力団体が選考。厳しい成績基準等を設け、派遣国と日本の架け橋として活躍する意欲をもつ、将来のリーダーとなるような留学生を募集



来日4〜5か月前

02 選考

選考基準に沿って各国で面接を含む選考試験を実施。国によっては大使館の協力を得て面接試験をすることもある。最終選考に残った応募者が提出した書類一式を日本側で審査し、晴れて合格すると留学生となる



来日1〜4週間前

03 来日前オリエンテーション

出発前に架け橋プロジェクトやAFS、日本について学ぶ。留学経験のある先輩の体験談やICL®（異文化学習）を通じて、日本留学に対する心構えを養う。大使館への表敬訪問を実施する国もある



04 来日直前準備

国際航空券手配、ならびに、査証申請に対しては、外務省の支援を得て、留学生が適法かつ安全に日本へ入国し滞在できるように、AFS日本協会と各国関係組織が連携のうえ、申請手続きを支援



来日　到着後、宿泊施設へ移動。

05 到着直後オリエンテーション／自主待機期間*

到着当日、全員がPCR検査を受検。宿泊施設の個室で、14日間自主待機。期間中、留学生の健康管理と同時に、オンラインにて、日本語研修および日本の文化・生活習慣、危機管理、衛生管理等に関する基本的な事柄等を指導。異文化における問題対処のケーススタディー、食事のマナーや入浴方法、交通ルールなどについても研修を重ねる

*2020年度、2021年度の自主隔離期間です。今後は期間が変更される場合があります（写真は2018年度）



06 ホストコミュニティーへの移動

自主待機期間の終了後に配属各地へ移動



07 ローカルオリエンテーション

配属地に到着後、受け入れ支部・地区にてオリエンテーションを実施



08 中間オリエンテーション

留学生が日本滞在中に、受入支部・地区が企画する滞在中オリエンテーションに参加。滞在地域における草の根レベルでの異文化理解の促進に寄与し、留学生の出身国と本邦との架け橋として将来活躍する素地を形成



帰国

09 帰国直前オリエンテーション

各自の日本での体験を振り返るとともに、帰国後のスムーズな再適応を促すプログラムの総括を行う。日本での体験を留学生が振り返る機会を提供する他、各国の仲間とともに、母国と日本の文化の違いについて共有し合い、日本に対するさらなる理解を深める　（写真は2018年度）



10 修了式・帰国

留学生の代表が日本語にてスピーチをし、滞在先ホテル各個室から留学生がオンラインで参加。PCR検査など、渡航に必要な準備をして帰国



11 帰国後リ・エントリー・オリエンテーション

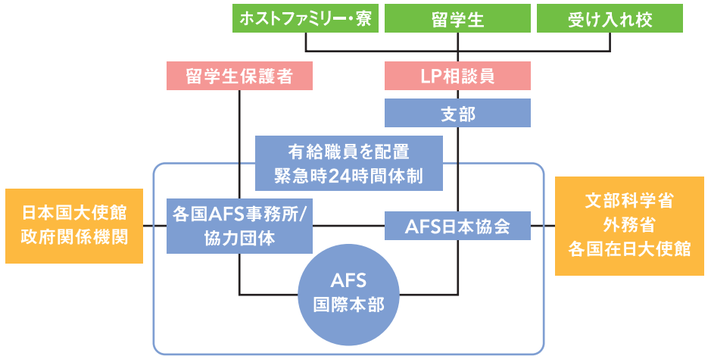
母国での再適応をサポートするとともに、コミュニティーでの日本体験紹介の準備をすすめる



サポート体制と安全対策

アジア高校生架け橋プロジェクトを受託・運営するAFSは、国際本部（アメリカ・ニューヨーク）を中心に、世界100か国以上のパートナーや協力国と連携し、70年以上にわたって留学プログラムを実施してきました。

2020年度のコロナ禍では、留学生の受け入れ・派遣に関する新たなガイドラインを作成。「アジア高校生架け橋プロジェクト」においても、派遣各国と受け入れ国である日本の双方が、感染状況を常時モニタリングし、プログラムの安全対策を進めています。



留学生の到着対応

2020年度～2021年度は留学生が政府の指針に基づき、安全最優先の対応策を実施しました。具体的には、①来日前72時間以内と来日当日のPCR検査を受検し、②宿泊施設の個室で14日間の自主待機 をしました。

2021年度は、①②に加えて、③政府指定国には、自主待機期間中のPCR検査を追加実施しました。入国前のワクチン接種状況や健康状態の確認も忘れずに行い、受け入れ地域の関係者へ伝えました。

入国直後の自主待機期間中は毎日、事務局職員が検温と配膳を行い、生徒の健康管理にあたるとともに、オンラインによるオリエンテーションを実施しました。留学生はホテルの個室からそれぞれセッションに参加し、医師によるコロナ禍での健康管理、滞在中の衛生管理、SNS利用等の生活指導を受講するとともに、レベル別に日本語を学びました。

配属地域での対応

留学生それぞれに担当者を配置

留学生一人ひとりに、担当者としてリエゾンパーソン（LP）を配置。LPは留学生の受け入れ地域に暮らすボランティアスタッフで、留学生・ホストファミリー・受け入れ校の間のパイプ役として、連絡・調整や適応課題を解決する手助けをします。2020年度以降は、各地の感染状況を踏まえて、滞在中のサポートを対面またはオンラインで実施し、特に感染防止に力を入れたサポートを行っています。

緊急時の連絡は24時間体制

留学生を支援いただくコミュニティーの安全を最優先に、留学生の安全指導につとめています。具体的には、独自に作成した「留学生受け入れガイドライン」を全国68支部のボランティア、ホストファミリー/寮、受け入れ校と共有しています。

留学生の急な発熱などに備えて、24時間体制で電話対応にあたっています。

異文化体験や交流を豊かにするサポート

留学生は、①来日前、②来日直後、③到着1か月後、④滞在中期、⑤帰国直前、⑥帰国直後に、それぞれオリエンテーションを受講します。このうち、受け入れ地域では③～⑤のオリエンテーションを実施。異文化学習を通して、留学生本人はもちろん、日常的に交流する人々の異文化体験をより豊かなものにするための支援に力を入れています。感染症対策として、事務局職員やボランティアから、季節・天候や感染状況に応じた衛生指導があります。このほか、定期的にメールレターを配信し、留学生を直接サポートするボランティア向けに、注意喚起を行っています。

ホストファミリーへのサポート

受け入れに協力いただくホストファミリーにも、オリエンテーションが行われます。最寄りのAFS各支部で企画されるイベントに参加し、ホストファミリー同士で話をすることも、情報交換につながっています。

AFSでは、コロナ感染に備えて、留学生が体調不良になった際の対応マニュアルを作成し、万が一の対応が即時にとれるよう対策しています。地域に温かく迎えられた留学生は、コロナ禍という特別な経験を学びに代えて、プログラムを修了しています。2022年度も、派遣各国・地域および日本政府の指針を踏まえ、各国・各地域の感染状況をモニタリングしたうえで、受け入れ地域と連携しながら安全対策を実施します。



医師によるコロナ感染予防指導セッションの様子



先輩留学生が作ったビデオを使い、
手洗いを指導


2021年度は衛生グッズ（マスク、ハンドジェル、体温計）を、2022年度は不織布マスクを全員に配布


滞在中期に実施する中間オリエンテーションの様子。オンラインで留学生・LPやホストファミリーが参加し、滞在後半の目標を確認

「架け橋体験」をひとりでも多くの後輩につなげたい

ASIA KAKEHASHI“Senpai” ネットワーク

3期生は2020年の4月から10か月間（年間プログラム）の来日予定でしたが、コロナ禍の影響により、来日予定が数回にわたり延期されました。この間、3期生を温かいサポートで支えたのは、1期生・2期生の“先輩”たちでした。

2020年4月、渡航延期となった3期生を元気づけたいと、およそ80人が手を挙げ、「アジア架け橋　最強の先輩たち-AKP Super Senpais-」を結成。国と時差を超えて6チームが編成され、SNSや動画でのコンテンツ配信を続けました。（配信期間：2020年5月～9月）。

@akpsupersenpais　@akpsupersenpais　https://www.youtube.com/c/VoicesofKakehashi



コンテンツは、

①ポッドキャストによる番組作成・配信（YouTube）
②日本語学習（Facebook/Instagram）
③日本の地域別滞在体験談（Facebook/Instagram）
④早口言葉コンテスト（Instagramストーリーズ）
⑤アジア架け橋テーマソングの作詞・作曲・ビデオ作成（YouTube）

チーム横断型で、技術・デザイン・翻訳担当が参加しました。

全体のリーダーをつとめたミャンマーの修了生は、「私たちは、アジア架け橋のおかげで多くの日本人と知り合い、同時に、アジアの隣人を知った。渡航延期に落胆する後輩を見て、何かしたいと強く思った。会議を重ね、滞在期間が短くなった分、私たちの失敗談、困難を乗り越えた体験、友だちを作るコツを伝えたらいいのでは?と考えた。先輩は後輩の面倒を見ることを、日本の高校生活で知った。わずかでも恩返しになるのなら、活動をするのは自然なことだった」と語ります。

日本の高校生・大学生も呼応

6月、アジア生の活発な動きに呼応する形で、受け入れ校で1期生のクラスメイトだった生徒が、日本紹介のSNSアカウント @kakehashier を開設。留学生のために日本の年間行事や季節に沿ったコンテンツ配信を開始しました。

7月には、高校生が主宰する伝統文化サークル「hiyori」がオリガミによるアジア生との交流を企画。SNSアカウントでオリガミLIVEを配信し、アジア全域から約80人の参加を得た。8月には、日本の大学生（高校留学経験者）が代表を務める「KAKERU」による書道LIVEを企画。渋谷の夜景と書道をLIVE配信し、約70人の参加を得ました。

国別「アジア架け橋」アカウントを創設

Super Senpaisの活動と並行し、各国の修了生が国別のSNSアカウントを開設。母語や英語によるコンテンツ配信が行われました（インド、インドネシア、カンボジア、スリランカ、トルコ、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、フィリピン、ラオス）。フィリピンは、自主活動のなかでメンター制度を採用し、修了生を先生役に、3つのレベルで日本語学習を進めました。

人と人、国と国が分断されるような閉塞感に満ちた時期、後輩のために連帯の橋をかけた先輩のアクションは、「自分もSenpaiになりたい」というロールモデルとなって、現在も各国の来日前研修での先輩サポート等につながっています。

Follow us!

アジア架け橋プロジェクト公式Instagram

事務局では、2019年5月にプロジェクト公式SNSを開設。現在、1.1万人のフォロワーがいます。来日中の生徒の日常、留学生一人ひとりの体験談を掲載中です。

@asia_kakehashi



SNSで更新を続けた
「日本滞在に必要な」日本語学習



ポッドキャスト番組「Voices of Kakehashi」



作詞・作曲・歌・演奏・動画編集……すべて修了生が作った
アジア架け橋公式ソング「Our Bridges-私たちの橋」

＼ オンラインで「心が動く」交流を ／

“もうひとつの”アジア架け橋

2020年春以降、全国各地の高校から「コロナ禍で、生徒の関心は高まっているのに国際交流が一切できない」という声が届きました。そこで、留学生を介して日本の高校生のグローバル・コンピテンスを育成する2つのプログラムを企画・実施しました。

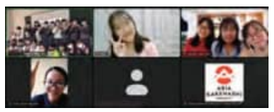


Program 1 Closer to you! アジア“教室”架け橋プログラム

日本の教室とアジアの高校生をオンラインでつなぎ、高校の交流ニーズに応じて双方向型の交流を促すプログラムです。2020年8月からスタートし、架け橋プロジェクトの受け入れ校をはじめ全国20校で実施。渡航待機中の留学生約150人が参加しました。



日本の高校からは、クラス・学校や地域を紹介するプレゼンテーションやクイズを出題。海外からは、来日延期となった留学生が参加し、母国の概要・生活・伝統文化や学校生活を紹介しました。家族、ペットや近所の友達が出演することもあったのはライブならでは!



オンライン交流は、時に、通信状況によって音声が途切れるハプニングも。だからこそ、注意深く相手の英語・日本語に耳を傾けるようになります。交流の時間では、互いの顔がどんどん画面に近づくのが印象的でした。



ボランティアの声

「“教室”架け橋プログラム」は、コロナ禍のピンチをチャンスに変えたプログラムだと思います。オンラインでの交流ですが、参加者たちは、対面と変わらぬ、いい意味での緊張感と親近感を互いに持てていると感じました。

（AFS北神奈川支部ボランティア）

Report

【NPOとの協働】日本全国の高校生と交流

2021年8月にはアジア架け橋プロジェクト生とNPO法人キッズドア「English Drive」で英語を学ぶ生徒がオンラインによる交流を行いました。詳しくは二次元コードからAFSのページをご覧ください。

https://www.afs.or.jp/news20211011/ ▶▶

Program 2 “架け橋さん”に聞いてみよう! アジア架け橋 高校生記者交流プログラム

2021年2月、2020年度の受け入れ校在校生を対象に、オンライン学習と校内取材を組み合わせた2週間のプログラムを実施しました。全国11校25人の高校生が参加し、8か国15人の留学生を取材。インタビューで知り得たこと・発表したことを原稿にまとめ、発表をしました。



事前学習（オンライン）

トレーニングを受けたボランティアがファシリテーターとなり、異文化理解学習の視点・考え方を学びました。留学生の立場で相対的な視点を理解した後、取材の手法を学び、校内でのインタビューに備えました。



校内取材

記者25人は、10日にわたって自校留学生の取材・撮影と原稿作成に取り組みました。留学のきっかけ、日本との習慣や文化の違い、将来の夢、政治や民主主義への思いなど、多岐にわたるテーマが語られました。



成果発表会（オンライン）

参加11校の高校生がインタビューの内容を発表し、全体で共有しました。「タイではギャンブルは違法」「中国では氷が入った冷たい飲み物は（身体に良くないと考えられており）飲まない」など、自国の文化や習慣を振り返る機会となりました。とくに、情勢が不安定なミャンマー生の言葉「死にたくない」は、すべての参加者の心に刻まれる言葉でした。



プログラム期間を通して、参加校の先生の協力・参加を得て、感染症対策と経過確認を担っていただきました。留学生や全国の高校生との意見交換を通して、自身とグローバル社会とのつながりを見いだすことができました。



高校生記者の声

“私はこの記事を通してピンカさんが日本に来て感じたこと、海外から見た日本の文化など自分では感じられないことを知ることができました。また、自分の考えている他の国に対するイメージが実際行ってみると、違うことも多いのかなと思ったのでいつか自分もいろいろな国に行ってみたいです。”

“取材を通して私は国家と個人の関係について考えました。架け橋さんはミャンマーの国内情勢的に今後の国際交流は難しいと言っていて、他国にいても国家と個人は互いに影響し合うと感じました。私は日本に少しでも良い影響を与えられるように日々精進しようと思いました。”

Report

【高校生記者レポート】留学生へのインタビュー

2021年2月には全国11校25人の高校生が「高校生記者交流プログラム」に参加しました。詳しくは、参加生徒が執筆した記事を二次元コードからご覧ください。 https://www.afs.or.jp/tag/student-reporter/ ▶▶

＼ 留学生の成長 ／

インド



ガリマ・ニカムさん

2020年度3期生（サビエル高等学校）
立命館アジア太平洋大学（APU）
（2022年9月入学予定）

モノクロだった私の世界が、カラフルになりました。

留学前の私は、世の中には“正しい答え”と“間違った答え”の二つしかないと思っていました。白か黒かでしか判断できていなかったのです。でも多くの日本人と友人になり、彼ら・彼女らの政治観や戦争に対する考え方などを聞いたとき私は、「自分の信念とは違う。でも間違っていない」と感じました。そして、「答えは決して一つじゃない。正しいか間違っているかではなく、たくさんの考えが世の中にあるのだ」と学びました。白か黒かしかなかった私の世界は、今とてもカラフルです。10代でこの経験ができて、本当によかったと思っています。

本当の日本の姿を、世界に届けたい。

日本に来なければわからなかったことがたくさんありました。例えば感謝の気持ち。インドで「ありがとう」は何気なく使う言葉のひとつですが、日本では心からの感謝の表れだと知りました。あるいは、広島の被爆者の方から聞いた「私たちはアメリカを憎んでいない」という言葉は、私にとって衝撃的でした。そうした本当の日本の姿をインドの人たちが知れば、両国の関係性も今以上に深いものになると思うのです。私が将来、インド大使になれるかどうかはわかりませんが、少なくとも両国が互いに深く理解し合えるための架け橋にはなる。そう心に決めています。

インド



リシタ・シンさん

2021年度4期生
（早稲田大学本庄高等学院）

インドネシア



アハマド・ファデルさん

2020年度3期生（札幌新陽高等学校）
早稲田大学理工学部1年

＼ after ／

私の人生にとって、大きな一歩になった。

幼い頃から宇宙への憧れを抱き、JAXAが主催するコンペティションにも参加していた私。航空宇宙産業で働きたいという夢をずっと持ち続けてきました。その夢への第一歩が、架け橋プロジェクトでの留学でした。留学先に日本を選んだのも、航空宇宙産業が発展しているからです。留学時には日本文化を学んだだけでなく、“時間を守る”などの日本で働くために必要な習慣も身につけました。今、私は再び日本に戻って早稲田大学に通っています。私が早稲田大学に行きたいと言ったら、触発された友達が「自分も早稲田に行きたい」と言い出しました。彼と大学でぜひ再会したいです。この場所で今まで以上に勉強に没頭し、いつかJAXAなどの機関で働くことができたならとてもうれしいですね。

カンボジア



モナ・アメリアザマンさん

2021年度4期生（サビエル高等学校）

日本の良さを持ち帰り、カンボジアがより良くなるきっかけになりたい。

日本の良いところをカンボジアの人たちに伝えていきたい。そしてカンボジアがより良くなっていくきっかけをつくっていきたいと思っています。例えば、日本では町中にゴミが落ちていることが本当に少ない。カンボジア人からすると、それは本当に驚くべきことなんです。ゴミが少ないきれいな環境で暮らすことの良さを、母国のみんなに伝え、カンボジアの町がもっときれいで快適な場所になっていったらいいなと思っています。

クラスメイトと見上げた星空が、本当の自由を教えてくれた。

トルコでは、夜間に子どもが外出するのは危険だと思われています。私の家も夜間外出禁止でした。でも留学先の隠岐島は、車のキーがつけっぱなしなんてこともある安全な島でした。そんな土地で、クラスメイトと夜の散歩に出かけたとき、たくさんの星に包まれながら私は思いました。「夜空を見上げるなんて、何年ぶりだろう。これが自由というものなんだ」と。留学中に、日本の果物の値段に驚いた経験からトルコと日本の経済関係を良くしたいと思い、春から神戸大学で経済学を学びます。

トルコ



ヤスミン・カラムトルさん

2019年度2期生（島根県立隠岐島前高等学校）
神戸大学経済学部（2022年4月～）
日本政府国費留学生

＼ after ／



マレーシア

＼ after ／





ジュン・ハオ・ヨンさん

2018年度1期生（北海道静内高等学校）
九州大学工学部（2022年4月～）
日本政府国費留学生

高校生だからこそ、たくさんのつながりができる。

高校生の留学だからこそ、友人やホストファミリーとのつながりを深くできると感じています。大学と違い、同じ歳の人と過ごす時間が長い。クラスメイトと毎日同じ授業を受け、部活仲間とも一緒になって汗を流し、お茶をたてる日々。本当にたくさんの友だちができました。ホストファミリーとの生活も楽しかったなぁ。本当の親のように接してくれて、いろんな相談にも乗ってもらいました。一緒に過ごす時間が、日本の文化、習慣、言葉を学ぶ上で大切だと感じます。

＼ 留学生の成長 ／

夢を追いかける決心を させてくれた場所です。

実は、母国にいた頃は進路に悩んでいました。高校で理系だったのですが、数学を勉強するのが徐々に辛くなってきて。そんな中日本に留学して、好きなアニメや日本のアーティストを通じて友達と意気投合したことで、「やっぱり好きなことに夢中になりたい」と決心することができました。今、東京の専門学校でアニメ・CGについて勉強しています。いつか、アニメ作品のエンドロールに自分の名前が出てくることを夢見て、頑張っています。



タイ

＼ after ／

ポーンチタ・トムクラトクさん（愛称：ノイ）

2018年度1期生（北海道登別明日中等教育学校）
東放学園映画専門学校
日本政府国費留学生

いつか日本で、国際関係を 築く仕事に就きたい。

留学を終えてから、母国スリランカでAFSのボランティア活動に参加するようになりました。私も本当にたくさんの人の助けがあって留学することができ、素晴らしい経験を得ることができました。だから今度は私が、夢を持って頑張っている人たちを応援する番だという気持ちが湧いてきたんです。将来は、日本の大学に進学し国際関係について学びたいと思っています。そしていつか、日本で働きながら、スリランカの生徒も応援できるような仕事に就きたいです。スリランカと日本との絆を深め、スリランカで留学を目指す若者たちを応援し続けていく仕事ができたらと願っています。

スリランカ

＼ after ／





タルーシャ・ディルシャンさん（愛称：タルー）

2019年度2期生（佐久長聖高等学校）
進学準備中／NGOインターン

架け橋プロジェクトが、 夢を抱くきっかけに。

高校時代の私には、はっきりとした夢がありませんでした。でも今は違います。日本に留学していろいろな経験をし、奥深い日本文化を知りました。特に「お疲れ様」や「ご馳走様」といったラオスにはない言語表現に興味が湧いて、ラオス国立大学に進学後は日本語を専攻。より深く日本文化を学んでいくうち、少しずつ自分の将来像が浮かんできました。将来、私はラオスの日本大使館で働きたい。生まれ育ったラオスと大好きな日本との関係を深める仕事に携われたらと考えています。架け橋プロジェクトは私にとって、夢への第一歩だったのです。

ラオス

＼ after ／





ケットマニ・オーネサイヴィエンさん（愛称：ケット）

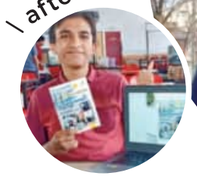
2018年度1期生（立命館高等学校）
ラオス国立大学文学部日本語学科

インドネシア

ムハマンド・ラティーフ・ファウジさん

2019年度2期生（札幌新陽高等学校）
文化外国語専門学校（2022年4月～）
日本政府国費留学生

＼ after ／





将来は、インドネシアと日本を つなぐ会社を立ち上げます。

かつて日本がインドネシアを植民地にしていた過去があり、私は日本のすべてに良い印象を持っていたわけではありませんでした。でも、日本に来て180度変わりました。文化、言語、礼儀正しさなどたくさんのインスピレーションをもらいました。特に心惹かれたのが建築の素晴らしさでした。私はこの春、建築を学ぶため日本に戻ります。卒業後は、日本の建設会社で経験を積み、いずれ母国で建設会社を立ち上げたいと考えています。インドネシアと日本、双方にメリットがある事業を推進する会社をつくる。それが私の夢です。

世界のどこででも 生きていける自信をつけた。

新しい国は、誰にとっても不安なもの。でも心をオープンにすれば、何も問題はないと知りました。来日当初、「こんにちは」しか話せなかった私に対して、ホストファミリーは辛抱強く接してくれ、クラスメイトは先生の話をわかりやすく伝えてくれました。おかげでいち早く日本での生活に慣れ、留学を素晴らしい機会にすることができました。私は今、新天地トルコで薬学を学んでいます。将来は世界を舞台にした医療ボランティアに携わりたい。どの国に行こうと不安はありません。そう思えるのは、日本での経験があるからです。

フィリピン



ハンナ・ジョイ・リコさん

2018年度1期生（愛知県立木曽川高等学校）
Hacettepe University（トルコ）

＼ after ／



バングラデシュ

＼ after ／





イクバル・プリトゥル・サミンさん

2019年度2期生（静岡聖光学院高等学校）
進学準備中

テクノロジーの進んだ日本で もっと学びたい。

小さい頃からロボットや飛行機が大好きで、テクノロジーの進んだ日本にはずっと興味を抱いていました。留学中は、クラスメイト、ホストファミリー、ボランティアの皆さんのおかげで、自分自身を成長させることができました。各国の留学生との交流もあり、国際感覚も身についたと感じます。以前なら見向きもしなかった国際問題にも関心を持つようになったのは大きな変化です。今私は日本でもっと学びたいと、日本の大学進学を目指し勉強中。将来は、航空などテクノロジーの分野で活躍できる人になっていきたいと思っています。

＼ 留学生の成長 ／

ベトナム

＼ after ／



ゴク・アン・チャンさん

2018年度1期生（サビエル高等学校）
大阪大学経済学部2年
日本政府奨学金留学生

多様な世界を知ることは、長い人生において必要なこと。

中学生の頃に、「海外へ出てチャレンジしたい」「自分の殻から抜け出したい」と思うようになりました。他の国をもっと知りたい、違いを知りたい、世界の人たちが何を考えているのかを知りたいと感じたのです。留学中は、自立した生活、日本の食事、人との出会い、日本語での授業など新しい体験の連続でしたが、おかげでさまざまな人の考え方に触れることができました。この経験は私にとって大きな財産です。架け橋プロジェクトは、「多様性に満ちたグローバル社会で自分はどう生きていくか」を教えてくれる場でした。

未熟だった私を大きく成長させてくれた。

以前の私は、人とのコミュニケーションが苦手でした。留学当初も、自分から話しかけられず悩んでいました。そんな私を助けてくれたのが、ある日本人クラスメイトでした。彼女は「あなたが心を開けば、みんなも心を開いてくれる」と話してくれました。“好かれなくちゃいけない”というプレッシャーが私を萎縮させていたと気づきました。そして私は変わりました。クラスメイトと冗談を言い合えるようになったときは、本当にうれしかったです。架け橋プロジェクトは、日本との絆を持てただけでなく、人間的にも成長できた機会でした。

インドネシア

＼ after ／



ディマス・ビモ・マハルディカさん

2018年度1期生（立命館宇治高等学校）
立命館アジア太平洋大学（APU）2年

フィリピン

＼ after ／



ニック・ゲンバートさん

2019年度2期生（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）
Centennial College of Applied Arts and Technology（カナダ）

一歩踏み出す勇気を持つことができた。

例えば納豆の美味しさだって、挑戦した人にしかわかりません。日本では、未体験のことに臆せず挑むことで自分の世界が広がっていくのを実感し続けていました。失敗を恐れるなと教えてくれたのは、ホストファミリー。私が日本語の間違いが多いことを気にしていると、「学ぶためだから間違えてもいい」と励ましてくれました。留学前の私は、思い切った挑戦をする度胸が足りていませんでしたが、大きく変わりました。今、カナダの大学で生物医学工学という難解な分野を学んでいますが、挑戦の決意ができたのは、日本への留学経験があったからです。

カンボジア

＼ after ／



オートドムチャリヤ・ソトさん

2018年度1期生（岩田高等学校）
Minerva University（アメリカ）

架け橋プロジェクトのない人生など考えられない。

日本の心を学んだ剣道部の活動、恋バナもした友人たちとの日々、将来についていつまでも相談に乗ってくれたホストファミリー……。日本でのさまざまな経験と人との出会いを通して私は、世界が広いことを学びました。留学を経て、出会ったすべての国の人々について考えるようになり、できることならより大きなスケールでこの社会に貢献していきたいと思うようにもなりました。今私は、新しい夢に向かって走り出しています。架け橋プロジェクトのない人生なんて私には考えられません。たくさんの後輩にも、私がしてきたような経験をしてほしいと願っています。

コンフォートゾーンから抜け出して挑戦する意味を知った。

以前の私は、心地よいと感じるゾーンからはみ出すようなことはせず、自分のコントロールが利く範囲内だけで生きてきました。そのせいで、自分の成長を感じることも少なかった。そんな私を変えてくれたのが留学でした。私は限られた期間で最大の経験を積もうと、今までにないほど行動しました。不安や怖さもありましたが、それでも挑戦し続けました。その経験が自信をくれたのだと感じます。帰国してからも、新しいことに貪欲な自分がいます。両親も「自分の目標にしっかり向き合えるようになった。日本があなたを変えてくれたんだね」と話してくれています。

インドネシア



ニバ・アディラさん

2018年度1期生（愛知県立旭丘高等学校）
Syiah Kuala University（インドネシア）

＼ after ／

中国

＼ after ／



ソ・ユカさん

2018年度1期生（茗渓学園高等学校）
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部2年

努力が及ばない時、“架け橋”が私の支えだった。

中学校を卒業した時に「日本の大学に行く」と決め、目標に向かって努力したはずが、入学早々コロナ禍が始まりました。現在、休学して中国に戻っており、9月に復学予定です。日本から離れた私を支えてくれたのは、“架け橋”の思い出でした。高校の友だちや、プロジェクトを通してできた世界中の友だちのこと。スピーチコンテストに出て優勝したこと。先生から進学のアドバイスと励ましの言葉を頂いたこと。思い出すたび気持ちが慰められたのです。“架け橋”で鍛えられたのは日本語能力だと思っていましたが、出会った人々や体験こそが私の支えだと気づきました。

留学生の1日

留学生は、各地域でどんな1日をすごしているのでしょうか？
密着取材を通じて、留学生の日常生活をお伝えします。
※2019年度発行『KAKEHASHI TIMES』から転載。留学生はふたりとも2期生です。



ラジャパクシェ・ラミッシュ

（2年1組 スリランカ出身／愛称：ラシー）

受け入れ校：愛媛県立松山東高等学校
ホストファミリー：宇根さん一家



6:00 起床



ホストシスターの寧々ちゃんとは、毎日一緒にお風呂に入るほど仲良し！

6:15 家族で分担して家事。ラシーの担当は掃除機！



6:30 ホストシスターと一緒に朝ごはん

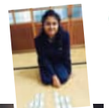


8:10 身支度を整えて登校。学校まで徒歩1分！



11:00 世界史の授業。とても面白い先生です

12:40 お弁当。2年1組のクラスメイトと



16:30 いろんな部活に挑戦してみました

18:00 結局、ホストシスターと一緒の天文地学部に所属。月を観察します

寧々ちゃんは本当の妹みたい。しゃべり出すと止まらない。





娘がふたりになったよう。言葉で困ることももうありません。

18:30 先に帰宅した人から家事をお手伝い。洗濯物をたたんだり犬と遊んだり

19:30 夕食。にぎやかな宇根家です。ラシーも伊予弁で話します！



ラシーは一歳年上だけど妹みたい。

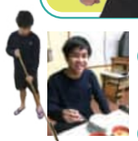
これまでやったことがなかった料理やスポーツにも日本に来てからチャレンジ。世界が広がっています。



パンユー・シサヌポン

（2年4組 タイ出身／愛称：ボート）

受け入れ校：神村学園高等部
（鹿児島県いちき串木野市）



7:00 寮で掃除・朝食 一日のはじまり



8:30 ホームルーム

9:45 午前の授業（異文化理解）



10:45 合唱練習 12月20日の音楽祭に向けて学年全員で



12:35 昼休み（食堂で昼食）今日もしっかりおいしくいただきました



13:35 午後の授業(体育) 期末テストも終わり、みんなでゆっくり グラウンド・ゴルフ



17:00 部活動 弓道部に所属。射法八節など礼儀から日本の心を勉強中



18:30 寮で夕食

19:30 寮内にて友達と。同じ寮で中等部・高等部・専門学校の男子が共同生活をしています

20:00 お風呂・自習時間

23:00 就寝

ボートはどんな人？



勉強を頑張っていて、今は日本語・英語半々で会話。女の子もみんな楽しませてもらっています。

良い雰囲気。授業ではみんなが知らないタイの文化を教えてくれて、異文化を知るいいきっかけになっています。



クラスで男子はふたりだけなので、日々協力しあって仲良く過ごしています！

優しくフレンドリーで、クラスが和やかになっています。



クーデターで人生が変わったミャンマー生

日本の大学に「桜咲く」

大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学（APU）は、大学・大学院生5,744人のうち2,651人（21年5月1日現在）が海外からの留学生で、日本の中で「混ぜる教育」を行っているトップランナー。アジア架け橋生やAFS留学生の多くが再び日本に戻ってきて、留学する大学です。
同大学東京オフィスの伊藤健志さんは、アジア架け橋生について「志の高さにびっくりしました。アジアのリーダーとなる逸材で、高校から日本にやってくるこのような留学生たちを継続して大学で受け入れ、世界に通用する人材として国際社会に送り出していきたいと思います。アジア架け橋生と日本の次世代の交流こそが、これからのアジアの信頼関係と平和を担ってくれると信じています」



伊藤さん（立命館アジア太平洋大学東京オフィス＝写真右）と同大に進学予定のミャンマー生

AFSの留学生は、本来、高校での留学生活を終えたら帰国することとなっています。しかし、20年10月に来日したミャンマーからのアジア架け橋3期生14人は、翌年2月に起こったクーデターのため、予定していた3月の帰国を保護者や本人からの人道上の理由で一年間延期、アジア架け橋生としてそのまま高校に通いました。その後、ミャンマー生たちは、母国に帰国しても高等教育を受ける機会が失われると、22年4月から日本の大学や日本語学校での進学を希望し、うち5人がAPUへ進学することになりました。

福島県立ふたば未来学園高校に留学したアウン・カン・ニャー・ボ（通称エリック）さんは、昨年秋、ヤンゴンに住む両親、祖母、姉が新型コロナに罹患、貯蓄していた学費は高額の治療費に消えてしまいました。いったんは大学進学をあきらめていましたが、一念発起して受験勉強に打ち込み、見事、学費全額免除の奨学金を得てAPUへの進学が決まりました。「国際関係学を学び、将来は国連かNGOで働き、ミャンマーだけでなく世界の平和のために貢献したい」とエリックさんは抱負を述べています。3期生から4期生にロールオーバーしたミャンマー生は、努力を重ねて奨学金を得て、APUのほか、早稲田大学、札幌国際大学、メロス言語学院に合わせて10人が2022年4月に進学しました。

ミャンマー生たちのほかにも文部科学省の奨学金などで再来日するアジア架け橋生は年々増えています。（→P.11進学実績）



人道上の理由で3期生から4期生にロールオーバーしたミャンマー生

世界を知らない自分に気づいた僕は今、アジアの仲間たちと世界に発信をしています。

留学生のニックはフィリピンの教育系の団体で活動していました。彼からアジアで実際に起きている貧困のリアルな話を聞き、世界のことを知らない自分に気づきました。アジアに目が向くようになった僕は今、APUに在籍しAd.（アド）という学生団体を立ち上げ「留学をみんなの選択肢にしたい」というコンセプトのもと、留学に関する情報発信をしています。もっと多くの人にこの体験をしてもらいたい。近いうちに僕もフィリピンに留学をしたいと思っています。自分の学んだことが生きるのかを、この目で、肌で、感じたいと思っています。

▼ 山口さんが情報発信をしているSNSはこちら
Ad. 留学をみんなの選択肢にする学生団体：https://www.instagram.com/ad.mgz/
YouTube チャンネル：https://www.youtube.com/channel/UCd5VfnzYJIO1s-f38w1SFAw

ホストブラザーのニックは26ページに掲載





山口 修平さん
立命館アジア太平洋大学（APU）アジア太平洋学部2年
架け橋2期生・ニック（フィリピン）のホストブラザー

学ぶ楽しさを教えてくれた。

実は高校時代、まったく勉強をしなかった時期が私にはありました。進路に迷い、勉強する意味を見いだせなかったのです。そんなときに留学生と出会い、必死になって勉強して日本語も日に日に上達していく姿を目の当たりにしました。私は、「留学生たちは勉強することで自分の世界を広げているんだ」と感じました。そして、「自分も勉強したい」と思うように。今は大学でペルシア語などさまざまな言語を勉強しています。はっきりとした将来の夢はまだ見つかっていませんが、勉強して新しいことを知ることがただただ楽しい充実した日々を過ごしています。



友人のタルーは24ページに掲載

上嶋 理尋さん
東京外国語大学 言語文化学部 ペルシア語専攻
架け橋2期生・タルー（スリランカ）の友人



友人のモナは23ページに掲載

福田 小雪咲さん
サビエル高等学校3年
架け橋4期生・モナ（カンボジア）の寮の友人

自分を変えていく勇気をもらいました。

たった一人で外国にやって来て、大変なことが山ほどあるはずなのに学校でも寮でもいつも笑顔で元気に過ごしている。いろんなことに興味津々で行動力もすごい。留学生の姿を見ていると、「見習わなくちゃ」と思うことがたくさんあります。心の中で思ってもなかなか行動に移せないのが私の欠点でしたが、留学生と出会ってから、そんな自分を変えたいと思うようになりました。「同じ年代の彼女ら・彼らがこんなにも頑張れるのだから、自分だってできる」。留学生から、そんな勇気をもらいました。



友人のケットは24ページに掲載

辻田 楓さん
筑波大学　国際総合学類3年
架け橋1期生・ケット（ラオス）の友人

留学生がいる高校に進学したかった。

中学時代から「英語を学びたい」「世界を知りたい」という想いを抱いていたので、高校進学時も国際的な校風があって留学生受け入れが盛んな学校を選びました。留学生と英語で話したり異国の文化に触れたりすることは純粋に楽しい時間でもあり、私の高校生活において留学生はとても大切な存在でした。今は大学で国際関連の経済や法律について学んでおり、将来も国際的な仕事に就けたらと考えています。留学生たちに負けないチャレンジ精神でこれからも行動し、夢をつかんでいきたいと思っています。

留学生と出会って、夢への想いが強くなりました。

留学生と過ごした時間は私にとってかけがえのないもので、とても大きな財産になりました。私がしたような経験をもっと多くの高校生にも味わって欲しいし、多様性のなかで学んでいって欲しい。留学生と生活を共にすることで、そう強く思うこともできました。そして今、私には夢があります。「多様性の溢れる学校教育を展開する事業に携わりたい。異なる人と人が互いの人生を尊重しながら、幸せの輪を拡げていくような学校教育を広く実現していきたい」。この夢に向かって突き進む力を得られたのは、他でもないノイのおかげです。



ホストシスターのノイは24ページに掲載

久居 由茉さん
早稲田大学　人間科学部2年
架け橋1期生・ノイ（タイ）のホストシスター兼クラスメイト

留学生と過ごした時間が、仕事にも活きています。

ホストファミリーとしてフィリピンから迎え入れたハンナ。当初は日本語に慣れておらず、私も英語が苦手。ジェスチャーも交えて、コミュニケーションをとっていました。やってみると言語の壁を超えて思った以上に意思疎通できるものだと気づきました。次第に、冗談を言い合ったりできるようになり、とても楽しい毎日を過ごせました。高校を卒業した現在私は、接客業の仕事をしています。お店には外国人のお客様も。相変わらず私は英語が苦手ですが、それでも臆することなくコミュニケーションをとることができるのは、ハンナのおかげです。



ホストシスターのハンナは25ページに掲載

加藤 未依菜さん
架け橋1期生・ハンナ（フィリピン）のホストシスター

山形県

私たちには、海の向こうにも大切な家族がいます。

我妻 恵子さん
家族構成：ご夫婦、娘さん（小学4年生）

Q1 受け入れにあたって不安だったことは？実際はどうでしたか？

インドネシアからの留学生、アマンダはイスラム教徒ということで来日前は、「ハラル食品って？ 我が家でハラルフードを準備できる?」と不安を感じたこともありましたが、取り越し苦労でした。実際は「豚肉以外は全部食べるよ」と。学校帰りに焼き鳥を買って食べたり、家でも日本食を満喫したりしていました。食事に気を遣いすぎる必要がないとわかり、ほっとしました。ただ、インドネシアは辛い料理が多く、これでもかというほど料理に唐辛子をかけるのを見て、驚いたことはありました。





Q2 留学生との思い出で印象的だったことは？

アマンダはとても人懐っこく、いつもニコニコしている子。我が家に、たくさんの笑顔をプレゼントしてくれました。アマンダの日本語は初めこそおぼつかなかったですが、特に聞き取りはみるみるうちに上達していきましたね。夫と娘は100％日本語ですが、来日から数か月後には不便なく会話できるように。夫の山形弁も普通に理解していましたよ。バリバリの山形弁で話す夫と、うんうんと頷くアマンダ。その光景が私にはちょっと面白くて、楽しい思い出のひとつになりました。



インドネシア
アマンダさん

Q3 留学生との生活を経て、ご家族に変化は？どんな刺激をもらいましたか？

一番成長したのは娘です。恥ずかしがり屋な性格で、家族以外の大人に自分から話しかけることはほとんどありませんでした。でもアマンダとはいつのまにか本当の姉妹のようになっていました。しりとりや鬼ごっこをしていつも遊んでいましたね。子どもが話す言葉は簡単なものが多いので、アマンダにとっても良い勉強になったかもしれません。アマンダが娘の世話をしてくれる間、私は家事に集中できてとても助かりました。



Q4 受け入れを終えて、今、どんなことを思っていますか？

アマンダとは、本当の家族になれました。アマンダが帰国した後、しばらくは心にぽっかり穴が開いてしまったと感じたほどです。今回、架け橋プロジェクトに参加し、こんなにも日本に興味を持ってくれている人がいるんだと知りました。「日本語を学びたい」「日本でこんなことを経験したい」……。そうした夢や目標を持った子たちのことは、これからも応援していきたい！ 娘にいろんな世界を見て、知ってもらうためにも、ホストファミリーの活動は続けていきたいですね。

福島県

笑い合って、泣き合って。家族みんなが成長できた時間でした。

内村 勇詞さん
典子さん
家族構成：ご夫婦、
息子さんふたり（高校2年生、中学1年生）

Q1 受け入れにあたって不安だったことは？実際はどうでしたか？

4人家族に、留学生ふたり。家事が大変?!という不安もありましたが、実際はさほど変わりませんでしたね。コツは、役割分担です。食器を洗うときはお手伝いをしてもらい、洗い終わった洗濯物もたたまずに子どもたちそれぞれのカゴを用意してそこに放り込んでおくだけ。もちろん部屋の掃除も自分たちで。学校に持って行くお弁当箱も、各自で洗ってくれていました。留学生もずっと“お客様”のままでいるより、頼まれ事をされたほうが気楽に過ごせると思いますよ。（典子さん）





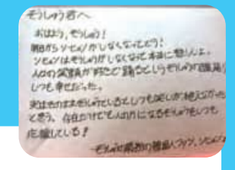
Q2 留学生との思い出で印象的だったことは？

インドネシアのフェリックスは、母国で生徒会長だったほどの優等生。でも新生活に馴染めず、悩んでいた時期も。葛藤を乗り越えようと頑張る姿は、今も心に残っています。元来、明るい性格だから最後にはたくさんの友だちに囲まれていました。クールで“イマドキの子”だったシーヒョンも、4か月を一緒に過ごし、思いきり笑って、泣き合える関係に。下の子にも「弟のためならなんでもする!離れたくない!」って。最後に見送りに行った空港で、いつまでも抱きしめてくれました。（典子さん）



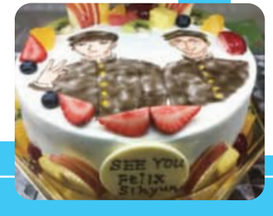
韓国
シーヒョンさん

インドネシア
フェリックスさん



Q3 留学生との生活を経て、ご家族に変化は？どんな刺激をもらいましたか？

私は、留学生にもっと上手に日本語を教えたいと、日本語教師の勉強を開始。高校生の息子は、メキシコへ海外インターンシップにいくことを決めました。留学生に刺激を受けて、私たちも挑戦を始めています。（典子さん）
ふたりとも自分からチャンスをつかみにいく姿勢がとても素晴らしいんです。学校行事に出演するためのオーディションがあるのですが、それに向けて一生懸命練習を重ねていたことも。その姿に私も感銘を受け、ふたりのことを職場の人たちにも話しました。社会人である私たちが、高校生に教えられましたね。（勇詞さん）



Q4 受け入れを終えて、今、どんなことを思っていますか？

アジア架け橋プロジェクトは、私たち家族と、韓国、インドネシアの学生との間に、絆をつくってくれました。ホームステイの良さは、もう一つの帰る場所ができることだと思っています。留学生のふたりにも「私たちは家族だと思っている。いつでも好きなときに帰ってきなさい」と伝えてあります。今も連絡を取り合っていて、「自由に海外を行き来できるようになったらまた会おうね。そのときはお互い、もっともっと成長していよう!」って約束をしています。（典子さん）

北海道

世界は広くて、いろいろ。それを教えてくれるのが、留学生たち。

佐々木 洋平さん
和世さん
家族構成：
ご夫婦、息子さん（小学5年生）



カンボジア
リザさん

Q1 ホストファミリーを始めたきっかけは？

学生時代、韓国に1年間留学し、海外の方々にとてもよくしてもらった経験があったんです。その恩返しではありませんが、外国から来た人たちには無条件でお世話したいという想いがもともと強かったんですね。私は海外に行き、その国の魅力はもちろんですが、日本の素晴らしさもあらためて実感することができました。日本に来る留学生にも、日本と母国、双方の良さに気づいてもらえたらと、ホストファミリーをしています。（洋平さん）



インド
フレイシャさん

Q2 受け入れにあたって不安だったことは？実際はどうでしたか？

家族が増えることで、家事が大変になると思っていましたが、案外大丈夫なものですね。家事炊事は、母親になったつもりで留学生たちに教えながら一緒にやっていましたから、負担を増やすことなくできました。家事も日々のお買い物も、実の子どもと同じようにお手伝いさせていましたね。留学生を受け入れるからといって、何も特別なことはしなくていいんです。家族の一人として普段通り接することが大切だと思っています。（和世さん）



インドネシア
アズラーさん

Q3 留学生との思い出で印象的だったことは？

ここは北国釧路 。留学生は皆、初めて見る雪に感動してくれます。インドのフレイシャとは、ワカサギ釣りにも行きました。そこではちょっとしたハプニングが。暖かい地域で育ったフレイシャは、いつも靴下を履かないんです。「今日は履いていきなさい」と言ったのに素足にブーツを履いてきて、雪の中をズブズブと。しまいにはブーツがぐしょぐしょだからと裸足になって……。すぐに「足痛いよー」って。「そりゃそうだー」ってみんなで大笑いしたのは良い思い出です。（和世さん）



中国
ユキさん

Q4 「ホストファミリーをやってみたいけど不安……」と思っている方にアドバイスを。

英語が苦手だからとホストファミリーに踏み出せない人が多いと聞きます。でも、思っている以上に日本語で大丈夫。心配しすぎず、友だちが一人増えるくらいの感覚で受け入れたら、発見があって面白いですよ。いろんな国のいろんな考え、価値観を間近で感じさせてもらうのは、家族にとっても良い成長材料です。息子もまだ小学生ですが、“海の向こうにも国があり、世界は広くていろんな考えがあるんだ”ということをあたりまえに知っている子に育ってくれています。（洋平さん）

沖縄県

本当の息子のようで、仕事の疲れも吹き飛ばしてくれました。

与那嶺 敬さん
のぞみさん
家族構成：ご夫婦



Q1 ホストファミリーを始めたきっかけは？

以前、短期留学生を受け入れたことがあり、とても良い思い出になったんです。そこで今度は、長期の受け入れをしてみたいと架け橋プロジェクトに参加。もともと私は刺激が大好きな人間で、受け入れは未知の世界を知るきっかけにもなり、とても楽しみでした。今回やって来たのは、フィリピンのカミコ。日本のアニメとお笑いが大好きな、面白い子でしたね。一緒にお笑い動画を観たり、外食をしに行ったり。あっという間の4か月間でした。（敬さん）





Q2 受け入れにあたって不安だったことは？実際はどうでしたか？

家族が増えることに特別な不安は感じませんでしたが、コロナ禍でどう対応すべきかは心配がありました。ただAFSのボランティアの方がとても協力的で、不明点は丁寧に教えてくれましたし、私たちが対応しきれないような事態があったときにはいつでもサポートしてくれるということで、不安はなくなりました。架け橋プロジェクトは、コロナ禍というイレギュラーな状況でも安心して受け入れる体制が整っていると感じます。（のぞみさん）



フィリピン
カミコシェーンさん

Q3 留学生との思い出で印象的だったことは？

カミコがいた時間は、最初から最後まで笑いっぱなし。私たち、普段は夫婦ふたりだけですが、カミコと「好きな子はできたの?」なんて会話をすると、本当の息子ができたようで楽しかったなぁ。当初は、考え方や習慣の違いに気を遣うこともあると考えていましたが、ほとんどギャップは感じませんでした。むしろカミコがいることで、癒やされました。私が仕事でモヤモヤしていたり疲れているときも、しばしばカミコが発する“ギャグ”のおかげで穏やかな気持ちになれましたね。（敬さん）

Q4 「ホストファミリーをやってみたいけど不安……」と思っている方にアドバイスを。

私たちみたいな“テキトー”な夫婦でも、楽しく受け入れられたということは伝えたいですね。留学生は皆、思った以上に自立しています。高校生ともなれば、自分のことは自分でできるのは留学生も同じですね。きっと子育てと一緒で、全部をやってあげる必要なんてないんです。国と国との違いなんて、私たちが思っているほどないんだと教えてくれるのも留学。受け入れる私たちにとっても、たくさんのことを学べる機会だとも思っています。（のぞみさん）

福島県

留学生が、寮生たちの新しい一面を引き出してくれている。



福島県 寄宿舎指導員
高木 許次さん／千葉 茂代子さん
福島県立ふたば未来学園高等学校

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

留学生受け入れが、寮生たちにとって“世界のことをもっと知りたくなる”きっかけになればと思っています。実際、とても良い機会になっていると感じます。留学生と寮生たちが衣食住をともにして、お互いの文化を直接学べることは本当に素晴らしいことです。日本人の高校生たちが、日本にいながら異文化を学べるのは、留学生がいるからこそ。とてもありがたいですね。
（高木さん）



Q2 留学生を受け入れることで、寮生たちにどんな影響が？

英語など語学に積極的になる寮生が増えました。異文化と触れあう楽しさを知り、もっともっと外国人とコミュニケーションしたいと考えたのでしょう。日本古来の文化に触れる機会が減っている現代社会ですが、「留学生に日本を知ってもらいたい」という気持ちがあらためて伝統文化を体験しようとする行動にもつながっている様子。寮生のなかには、「故郷のお祭りを紹介したいから」とお盆やお正月の帰省時に留学生と一緒に帰郷する子もいました。
（千葉さん）





Q3 留学生と寮生は、どんな生活を過ごしている？

寮生たちは自主的に寮内での催しを企画し、留学生たちとの生活を楽しんでいます。来日時には歓迎会を開いてイス取りゲームなどで盛り上がったり、留学生が披露してくれるアニメソングを皆で手拍子しながら聴いたり。クリスマスにはプレゼント交換をして、お正月には餅つき大会もやりましたね。そうして仲良くなって、卒業後も留学生と寮生たちはSNSなどを通して連絡を取り合っているようです。将来大人になって、海外旅行などに行った際、再会できたら素敵なことですよね。（高木さん）

Q4 寮にとって、留学生たちはどんな存在？

留学生が、寮生たちの成長を刺激してくれていることは強く実感しています。あまり自分からリーダーシップをとらなかった子が、寮のイベントをリードしてくれるようになったり。引っ込み思案だった子が、英語を学びたいからと「留学生と同じ部屋になりたい」と自分から言ってきてくれたり。寮生たちが一歩踏み出していくためのきっかけを、留学生がつくってくれているんだと感じます。今や留学生はこの寮にとって欠かせない、大切な存在になっていますよ。（千葉さん）

大阪府

日本の未来のために、若者同士の国際交流を衰退させてはいけない。



大阪イングリッシュハウス
代表取締役
渡辺 秀和さん

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

ここは、国内留学ができるアパートメントとして設立した国際学生寮「大阪イングリッシュハウス枚方（略称OEH）」。もともと外国人の受け入れは積極的に行っていました。しかしコロナ禍の影響で、訪日外国人が激減。近隣にある関西外国語大学の学生さんが語学力向上を目的に多く入寮しているのですが、このままでは普通の日本人寮になってしまう……困っていたところ、架け橋プロジェクトと出会いました。現在、モンゴル、韓国、タイ、カンボジアからの留学生を受け入れています。日本人大学生と高校生の留学生との共同生活ですね。





Q2 留学生を受け入れることで、寮生たちにどんな影響が？

架け橋生は皆、勉強熱心で感心します。大学生の英語力向上を圧倒する速さで、留学生たちの日本語は上達していっていますね。大学生にとっては「負けてられない」と刺激になっているのではないでしょうか。また、生活態度もとてもしっかりしています。ちょっとだらしない面がある大学生には、よく引き合いに出してこう言っていますよ。「みんなが高校生だった頃、こんなにしっかりしていたか？」って（笑）。



Q3 留学生と寮生は、どんな生活を過ごしている？

寮では、餅つきなどの日本の伝統行事を体験したり、留学生の母国の料理を皆で味わったりと、留学生と日本人大学生が交流を深めるイベントを感染症対策に注意しながら定期的に開催しています。楽しみながらコミュニケーションをとることで、人間対人間として絆が深くなるだけでなく、各国の文化を深く知り合う機会になっています。留学生たちはさらに日本のことが好きになり、大学生は各国への興味関心を高めていく。そんな効果が生まれています。

Q4 寮にとって、留学生たちはどんな存在？

成長著しいアジアからの留学生は、私たち日本人にとって大きな刺激です。しかし、私は仕事柄、留学事情をよく調べるのですが、日本に来たがる若者は年々減っている傾向にあると実感しています。このままでは、将来の日本と海外の架け橋となる人材が不足してしまいかねない。そんな危機感を抱いています。これからますます成長を重ねていくだろうアジアとのつながりを強くするためにも、若い学生同士が国境を越えて交流できる架け橋プロジェクトは、とても重要な活動だと考えています。

大阪府

国籍の違いなどを感じさせない絆を、生徒たちは築いていってくれています。

大阪府立北野高等学校
WWL主任：松山 知紘先生
WWL推進室所属：山本 美里先生

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

当校は、文部科学省が実施するWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材を育てることを目的とした活動）の拠点校になっており、その事業の一環で架け橋プロジェクトを通じた留学生受け入れをすることになりました。これまで米国シアトルの姉妹校から短期留学生の受け入れは毎年行っていましたが、アジアからの長期受け入れは初めて。在校生たちが世界各国の文化に触れ、幅広い知見を身につけてくれるのではと考え、スタートしました。（松山先生）





Q2 生徒や学校にとって、インパクトのあった出来事は?

留学生たちは、受け入れクラスだけでなく、他クラス・他学年の授業や課外研究にも積極的に参加してくれました。おかげで学内でのコミュニケーションの輪が広がり、多くの生徒と絆を結んでくれたと感じます。子どもたちの順応性は我々大人以上に高く、気づいた頃には留学生がいる光景が校内では当たり前になっていました。留学生と在校生とが、何の分け隔てもなく笑い合い、切磋琢磨し合う。日本人生徒同士の絆と何ら変わりのない絆が、そこには生まれていましたね。（山本先生）

Q3 留学生の存在が、学校教育に影響を与えてくれたことは?

留学生の多くが英語堪能でした。在校生たちは「留学生にとっても英語は第二外国語なのにこんなにも積極的に学んでいる」「高校生なのに、3か国語・4か国語を話すのはすごい!」と刺激を受けていました。「私ももっと英語を話せるようになりたい」と語学学習に意欲を示す生徒も多かったですね。語学という切り口だけをとっても、留学生はとても良い影響を本校に与えてくれましたから、アジア各国からの留学生受け入れは今後も絶対継続していきたいと願っています。（松山先生）



Q4 留学生受け入れに不安を感じている学校にアドバイスを。

長期の留学生受け入れは、当校として初めてでしたので、正直不安もありました。教員としてしっかりサポートしていけるだろうかと。でも、架け橋プロジェクトの担当の方に言われたのは、「特別なことはせず、普段通りに授業してください。特別なことをしても長続きできませんから」ということでした。実際に受け入れをして、その言葉は正しかったと感じます。いつも通りの学校生活を留学生に味わってもらう、その意識で良いと思いますよ。（松山先生）



早稲田大学本庄高等学院
半田 亨学院長

自然体で受け入れありのままの心で絆を深めていく。

埼玉県

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

最も期待する効果は、英語学習への刺激です。留学生の日本語がおぼつかない段階では特に、英語でのコミュニケーションが増えます。英語をあたりまえの環境にするのは校長の役目だと考えていますが、そのために留学生の存在は不可欠ですね。またこれは私見ですが、英語圏でなくアジアからの留学生だからこそ、積極的に英語で話しかけやすい面もあると感じます。互いに母国語でないからこそ、文法など些細な間違えを恐れず思い切って話すことができると思うのです。また、アジアは時差が少ないことも利点。例えば、留学生の母校とオンラインでつなぎ、課外授業として双方の生徒同士がディスカッションをするといった機会も、アジアとならばやりやすいですね。





Q2 印象に残っている出来事は?

架け橋4期生だったインドからの留学生・リシタは、やりたいことや挑戦したいことを自分から積極的に発信してくれる子でした。日本文化についても来日前にいろいろと調べてきたようで、雛人形の飾り付けにも関心を持っていました。そこで私の自宅に10年近く眠っていた雛人形を引っ張り出し、一緒に飾り付けをしました。「お内裏様とお雛様は右か?左か?」、「五人囃子の順番は?」と飾り方を私もすっかり忘れてしまっていましたので、ネットで検索しながら飾ったのは良い思い出です。聞けば、リシタが育ったインドにも、“ナヴァラトリ”という雛人形に似た文化があるそう。互いの伝統文化を学び合う機会にもなりました。



Q3 生徒や学校にとって、インパクトのあった出来事は?

リシタの熱心さには、生徒たちも大いに刺激を受けていました。例えば日本語の上達ぶりは驚くほど。12月の段階では、帰国子女の生徒に授業内容を通訳してもらうというサポートをしていましたが、冬休み中、一生懸命に取り組んだのでしょう。休み明けにはその必要がなくなっていました。部活動も、バドミントン部、ESS、茶道部、書道部と複数に参加。私が顧問を務める茶道部では、日本人でも難しい作法をあっという間に身につけてしまいました。学ぼうとする姿勢と意欲の表れですね。また「ヒンズー語講座を開きたい」とも話してくれ、毎回10名ほどの有志の生徒を集めて勉強会を開いていました。そうした積極的な活動があったからこそ、リシタと生徒の間に強い絆が生まれたのだと思います。リシタが帰国する際には、感謝を伝える生徒、抱き合って泣く生徒がいました。

Q4 留学生受け入れに不安を感じている学校にアドバイスを。

気負う必要はありません。学校として特別な体制を組む必要もないと考えます。いつも通り、自然体で受け入れることでこそ、本来の日本の高校生活を留学生に提供できるはずですから。必要なのは、留学先に日本を選んでくれた子たちに日本のことをたくさん知って帰って欲しいという、純粋なホスピタリティだけです。それさえあれば、何も不安に感じることはありません。留学生もありのままの日本の高校生活を体験したいはず。私たちはいつも通りの環境・心持ちで受け入れればいいのです。教師として子どもたちに向ける愛情や熱意は、他の生徒と何ら変わりはありません。

神奈川県

教科書だけでは伝えきれないことを、留学生たちが教えてくれる。

公文国際学園高等部
マイケル・シェラー先生

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

自分と異なる言語、文化、価値観、バックボーンの人と接する経験を高校生のうちから持つことは、将来的な国際平和や文化的・経済的な国際交流につながっていくと考えています。同じアジアに住む人間同士でも考え方や物の見方には異なる部分がありますから、留学生と在校生とが互いに多くの気づきを得て、視野を広げていってくれているように感じます。また純粋に、世界中に友人が増えるということも素晴らしいことですね。





Q2 生徒たちにはどんな変化がありましたか?



架け橋プロジェクトに参加した初年度こそ、校内に少し浮き足立った雰囲気があったり、なかなか留学生に話しかけることができない生徒がいたりしました。でも徐々に、壁のようなものはなくなっていきました。外国人のクラスメイトと机を並べることに違和感を覚えなくなり、良い意味で「これが普通だ」と捉えることができるようになっています。留学生を特別な存在として見るのではなく、ひとりの友人として自然体で受け入れられるようになった。それは生徒たちのとても大きな成長だと思います。



Q3 留学生の存在が、学校教育に影響を与えてくれたことは?

「“多様性”とは何か」を伝えることは、今の学校教育においてとても重要だと考えています。その意味で、留学生の存在はとても大きい。教科書だけでは伝えきれないことを生徒たちは、留学生との触れ合いを通じて感じ取り、学んでくれています。また留学生は、私たち教員にも良い刺激を与えてくれています。グローバル化している社会において、どのような教育が生徒たちに必要かをより深く考えていくきっかけになってくれていますね。

Q4 留学生受け入れに不安を感じている学校にアドバイスを。

留学生受け入れを素晴らしい機会とするポイントは、教員の力だけでやろうとしないこと。新生活にまだ慣れていない留学生を一番近くで手助けできるのは他でもないクラスメイトですから、生徒のバックアップは不可欠です。留学生のサポートは、高校生にとって簡単なことではありません。それでも、いつしか互いに笑い合っている姿を見ると、とても頼もしく感じます。また、誰かを助ける・支援するという経験は、生徒自身にとっても将来の糧になっているはずです。

北海道

留学生と日本人生徒とが、刺激しあって夢を膨らませていく。

北海道登別明日中等教育学校
山岸 充明先生

Q1 留学生を受け入れている目的を教えてください。

やはり、生徒の視野を広げることが一番です。広い世界の素晴らしさを知り、同時に、自分たちとの“違い”を受け入れていく土台づくりをしてくれたらと考えています。外の世界を知ることで、あらためて日本の良さや地域の良さを知るきっかけにもなっていますね。特に、架け橋プロジェクトはアジア各国とのつながりをつくることができます。英語圏だけでなく幅広い国々とつながりを持てることは、生徒たちにとって、とても有意義なことだと感じます。





Q2 生徒たちにはどんな変化がありましたか?

生徒たちにとって「外国人ともこんなに仲良くなれた」という経験は、自信にもつながっています。それによって、将来の夢を具体的に考えられる生徒も増えました。私は、自信が夢を膨らませると思っています。自信を持てたからこそ、挑戦したいことが増えていく。だから夢が具体的になっていくのだと考えるのです。留学生は、生徒たちの夢も膨らませてくれたんです。



Q3 留学生の存在が、学校教育に影響を与えてくれたことは?

グローバル教育、国際理解教育がとても進めやすくなりました。正直、カリキュラムだけではアジアの国々を深く理解することがなかなか難しい。でも、留学生と直接話すことで、異文化に対する生徒たちの興味関心が強くなっていることを感じます。また、言語活動も盛んになります。私は英語教員ですが、日本人だけで授業をするとどうしても「日本語でも伝わるから」という甘えが出てしまう。でも相手が外国人となると、伝えようとする必死さが違ってきますね。

Q4 未来への可能性を感じた場面はありましたか?

架け橋プロジェクト初年度にタイから来てくれた子は、母国で高校を卒業した後、再び来日。もともとアニメが好きな子でしたが、留学経験を通して、日本への関心、アニメへの興味が強くなったのでしょう。将来は、タイ文化と日本文化をつなぐ仕事をしてくれるようになるのではと楽しみにしています。



山口県

“遠い国”が“友人の国”になる。留学生が、世界を大切に想うきっかけに。

サビエル高等学校
野口 美奈子先生



Q1 生徒たちにはどんな変化がありましたか？

架け橋プロジェクトの4年間で、13か国24名の留学生が本校に。多様な国々からやって来る留学生の存在が刺激になって、生徒たちはそれまで以上の積極性を発揮してくれるように。例えば、控えめな性格だった生徒は、留学生の暮らしをサポートしていくなかで「ホストファミリーをしたいです」と自ら立候補してくれ、学校全体でも「卒業後は国際交流に関わる学科に進みたい」という生徒が増えました。留学生との交流が、将来の道を見つけ出すきっかけにもなっているようです。



Q2 生徒や学校にとって、インパクトのあった出来事は？

2021年度、ミャンマーから留学生が来てくれていました。しかし留学中に母国でクーデターが発生。帰国を延期せざるを得ない状況になってしまったのですが、その子は「母国で起きていることを、皆にも知って欲しい」と全校生徒の前でプレゼンしてくれたのです。おかげで生徒たちは、“遠い国の出来事”だったことを“友人の国で起きていること”として考えられるようになりました。その後、校内ではミャンマーのためにできることを考えるグループもでき、生徒たちは自発的な活動を続けてくれています。



Q3 未来への可能性を感じた場面はありましたか？

ベトナムから来た留学生は今、大阪大学で経済学を学んでいます。彼女は本校に留学中、ベトナムのことをクラスメイトや地域の人たちに教えることがとても楽しかったそうなのです。将来は、ベトナムのことを日本人に伝え、また、日本のこともベトナム人に伝えていくことがしたいと話していました。修了生がいつか母国と日本を固い絆でつないでくれるんだろうと思うと、なんだかうれしくなりますね。



Q4 留学生受け入れに不安を感じている学校にアドバイスを。

あえて特別な準備をせずに受け入れたほうが上手くいく、そう思います。仮にトラブルがあったとしても、日本人生徒同士の問題と変わりません。予想外のことが起きるのは、教育現場ではいつものこと。普段通りでいいんです。「問題が起きたら、その都度解決していけばいい」くらいで丁度良いと感じます。AFSからのサポートも万全で、いつでも留学生や生徒たちを最優先した柔軟な対応ができる体制も整っていますから。

次世代の国際交流を刺激する「小松モデル」

自治体－高校－ボランティアの連携で、双方向の留学を実現

石川県小松市。歌舞伎ファンなら誰しも知る義経と弁慶の名場面「勧進帳」の舞台となった「安宅の関」があったところです。人口11万人弱の小松市にはソウル、上海などに直行便がある国際空港があり、国際交流に熱心に取り組んでいます。



九谷焼の絵付けを体験するインド人学生

今年、AFS小松支部は20周年を迎え、これまでに57人の小松市在住の高校生が留学し、59人の留学生を受け入れ、そのうちインドネシア、ブータン、スリランカ、トルコ、タイからの5人がアジア架け橋生です。毎年、途切れることなく留学生が往来しているのは、小松市との連携が大きな役割を果たしてきたからです。
小松市在住の高校生には、留学する時に30万円の奨学金が支給されています。また、市では、90日以上留学生を受け入れるホストファミリーに一日500円の支援金が支給される制度もあります。一人の留学生を受け入れると、それなりに食費がかかります。そこに配慮すれば、ホストファミリーの負担減となるからです。

留学生は、同世代に刺激ときっかけをもたらす

毎年留学生が来日した時と、帰国する時には、留学生たちは必ず、市役所を訪れ、市長や教育長ら幹部を表敬訪問します。「私も中学三年生の時に姉妹都市のイギリス・ゲイツヘッド市でホームステイをした経験があります。十代で旅行ではないホームステイをして、同世代と交流することがその後の大きな糧になります。留学生の受け入れは、小松市の青少年が世界に飛び出していくきっかけとなります」と宮橋勝栄市長。
毎年、留学生を受け入れてきた小松市立高校の三藤加代子校長は「国や言葉が違い、文化の背景も異なる高校生が同じ空間で過ごすことは刺激となります」。図書館には、留学生の母国の歴史や文化の本を並べ、留学生自身がお国自慢するコーナーを設けています。今年は、トルコからのジャンスさんがトルコについて日本語で紹介しました。



留学生の出身国をテーマにした特設コーナー（図書館）

次世代にアジアや世界の平和を考える機会を

市と高校、支部ボランティアがスクラムを組むことに力を入れてきた大畑清三・小松支部前支部長は「アジア架け橋生は日本への関心が深く志が高く、小松の次世代にアジアや世界の平和を考えるいい機会となっています」。異文化理解教育を推進する「小松モデル」が日本全国に広がれば、日本は確実に外国人に優しい国に発展していくでしょう。



市長を表敬訪問する留学生（右から3人目が宮橋市長）

高校生留学を支えるボランティア



アジア高校生架け橋プロジェクトを支えているのは、全国各地で活動する約1,600人のボランティアです。日本には全国各地に約70のAFS支部や活動拠点があり、全員が報酬を受け取らないボランティアとして活動しています。

ボランティアは、留学経験者やその保護者、元ホストファミリーや教員です。それぞれの知識と経験を生かしながら、地域コミュニティーのなかで、留学生はもとより、彼らの異文化理解に伴走するホストファミリー、受け入れ校をサポートします。地域の商店・企業・団体や自治体・公共施設の協力を得るときも、ボランティアが尽力します。「アジア架け橋」は、多くの賛同者による無償の貢献活動によって、全国各地でアジア生との国際交流を実現しています。

※ボランティアの中でも、特に留学生・ホストファミリーと密接にかかわるのが、LP（Liaison Person　リエゾン・パーソン）です。プログラム期間中を通して留学生・ホストファミリー・ホストスクールや地域をつなぎ、情報を伝えたり、相談に応じたり、話し合いの場を設けたりと、必要に応じたさまざまな支援を行います。

関わる人、皆が成長できる機会



ホストファミリーは約20年前から、AFSでのボランティアも今年で12年目になります。私がボランティアを続けている理由は、お金では決して買えない経験をしたいと思うからです。活動に携わることで得られるものは、とても大きい。いろいろな人と知り合えて、いろんな考え方を学べて、視野が広がり、国際感覚も身につく。自分の見識が広がっていくことがとても面白く、留学生と一緒に成長している感覚です。しかも時折、涙するほどの感動的な場面にも遭遇できるのですから、本当に充実した日々を送れます。さらには架け橋プロジェクトの活動は、将来の国と国との仲をより良くしていく一歩にもなっているわけですから、大きなやりがいも手にすることができますね。

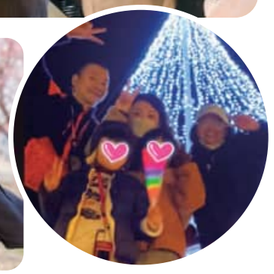
愛知県　長澤 紀美江さん



新しい楽しみ、新しいやりがいを見つけました







我が家では十数年前からホストファミリーをしており、仲介のボランティアの方々に何度も助けられとても感謝していました。そして次第に、私も支える側の活動に参加したいと感じるようになりLPへの挑戦を決めました。LPの一番の喜びは、留学生が「日本に来てよかった」と思って帰国の途についてくれること。実際、別れ際に留学生から「日本が大好きになりました」「すべての優しさをありがとう」とメッセージをもらうと、本当にうれしくなります。慣れない環境で留学生がどれだけ努力してきたかを想像すると私の涙も止まらなくなります。また、彼ら・彼女らが将来の日本とアジアをつなぐ人になってくれると考えると、この活動に携われていることに誇りも感じます。



徳島県　久保 かよさん

成長した留学生の姿を見て、すべての苦労が帳消しに



群馬県　土田 奈緒子さん



15年ほど前からAFSで留学生支援のボランティア活動をしてきた私が感じるのは、留学生は本当に優秀で熱意のある子ばかりだということ。学校やホストファミリーの皆さんからも「とても良い生徒を紹介してくれてありがとう」と感謝いただけることが増えました。それでも留学生の成長をサポートするこの活動は、マニュアルが通用するものではなく、大変なこともあります。でもだからこそ得られるものも大きい。留学を終え、大きく成長した留学生やお別れの駅で涙を流しながら手を振るホストファミリーの皆さんを見ると、すべての苦労が消えてなくなる充実感と感動を覚えます。たくましく育った留学生の姿こそ、私たちボランティアにとって最大の喜びだと私は感じます。

国同士の関係性を超越した、人と人との絆





以前、「日本に行くのが怖い」と来日前に話していた韓国人留学生がいました。日韓関係が芳しくないことから、「日本に行ったらいじめられるのではないか」と思っていたそうです。でも実際に来てみたら、抱いていたイメージとはまったく異なる日々を過ごして帰って行きました。こんな話もあります。国同士では決して良好とは言えない関係の隣国。両国からの留学生も当初は互いに快く思っていなかった様子でした。しかしAFSでの数か月間の活動を共にすることで、ふたりはかけがえのない友人同士に。国と国との事情を超えて、正しく相互理解し絆を深めていけるのは留学の最大の意義。日本とアジアの未来のためにも高校生同士の国際交流はますます活発にしていくべきだと感じています。



東京都　乾 敬子さん

地域と留学生との間の架け橋に





留学生には学校内だけでなく幅広い交流を持って欲しいと思い、コロナ対策を施しながら地域との交流機会をたくさんつくってきました。地域の方々の協力を得て、留学生と沖縄の伝統芸能を体験しに行ったり、沖縄戦の戦跡を訪ねたり。地域交流を図りながら、沖縄の文化や歴史を一緒に学びました。取り組みの後、地域の皆さんから「私たちも良い経験になりました」と直接感謝の言葉をいただくこともありましたし、“留学生受け入れの体験談”を地元新聞に投書してくれた方もいらっしゃいました。とてもうれしかったですね。アジア各国の高校生と沖縄をつなぐLPの活動は、私自身にとっても地域に貢献していることを実感できる大切な経験になりました。

沖縄県　加藤 崇洋さん

子どもたちが国際交流のエンジン



気軽な気持ちで参加した架け橋プロジェクトでしたが、留学生と触れ合っているとやっぱり親心が生まれてくるものです。ここ最近はコロナ禍の影響で外出もままならない時期がありましたが、皆が孤独を感じてしまっていないか心配でなるべく多くのコンタクトをとるようにしていました。感染に注意しながら、ときには一緒に観光地に出かけたり、氷祭りや冬のスポーツを楽しんだり。サポートするはずの私のほうが楽しんでしまうほどの時間を過ごせました。うれしかったのは、旅立ちのとき留学生がさようならではなく、「行ってきます」と言ってくれたこと。この子たちがまさに未来の架け橋なのだと感じましたし、母国の高校で日本での経験を後輩たちに伝えてくれたら、また次の世代の留学生を生むことにもなるだろうという期待も膨らみました。

北海道　前山 久美子さん





社会とつながり、社会の役に立っているという実感





若い頃は外資系銀行に勤め、大好きな仕事に没頭していました。ですが当時は仕事と子育ての両立が難しかった時代。子育てが忙しくなると、退職せざるを得ませんでした。それから月日が経ち子どもたちが巣立つと、今度は自分の時間が有り余るように。「社会とのつながりを持ちたい、誰かの役に立ちたい」と考えるようになりました。そしてAFSでのボランティアを始めました。ボランティア活動は部活動のような楽しさがあります。ボランティア仲間やホストファミリーの皆さんとは一緒になって日々の難題に取り組みながら交流が深まっていきますし、その輪の中には世界中の高校生もいて刺激的です。私は今、若い頃とはまた違った人生の豊かさを手に入れていると感じています。

大分県　志賀 志保子さん

キーワードで考える

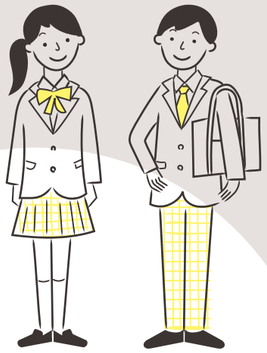
アジア架け橋

SDGs「行動の10年」のゴールは2030年。日本の高校生が社会に出る時、グローバルな視野をもつことはますます重要になります。多様な背景をもつアジアを、キーワードで探ってみましょう。



若者

世界のIT分野をけん引するインドの国民平均年齢は28.4歳（日本は48.4歳）※1。ASEAN加盟10か国もシンガポールとタイを除き20代半ば～30代前半と、若者が国の中心を占めており、経済成長の機会とグローバル人材への期待が増しています。



制服

タイは、通年一種類の制服で過ごしますが、毎日洗ってアイロンがけをします。インドネシアは、制服が日替わりで5～6種類あるそうです。ベトナムでは、生地を買って仕立てます。日本の制服は、アジア生に大人気です。





茶

トルコは、一人あたりのお茶消費量が世界一※4。パキスタンには「一杯目は他人、二杯目は客人、三杯目は家族」という諺があります。スリランカは、ヨーロッパ・インド・中東など多文化の影響を受け、茶菓子の種類も豊富です。

出典：

※1　"World Population Prospects 2019, Online Edition. Rev. 1". United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division. 2019.

※2　"Global Gender Gap Report 2021". World Economic Forum. 2022.

※3　"Global Gender Gap Report 2020". World Economic Forum. 2019.

※4　2016, Statista, "Annual per capita tea consumption worldwide as of 2016, by leading countries(in pounds)". https://www.statista.com/statistics/507950/global-per-capita-tea-consumption-by-country/ （2022年3月15日閲覧）

女性のリーダーシップ

アジアでジェンダーギャップが最も少ないのはフィリピン（世界17位）※2 で、管理職に占める女性の割合が52.7%※3。日本は14.9%です。フィリピンは、出生率も世界一位です。







環境

エネルギー資源が豊富なブルネイは、自然環境保護にも力を入れています。SDGsの目標は、アジア架け橋生の共通関心事。エネルギー、技術革新、教育機会、格差是正、水問題……質問すると、みんな雄弁になります。

平和

独立を経た国・内戦中の国や、複数の国境に接する国があります。平和とは「武器をとらず、隣人を疑わず、家族を失う悲しみがないこと」「未来に選択肢があること」と言う生徒たちも。争いは終わっても、地雷の除去に途方もない年月がかかる国もあります。







島国

日本の2倍以上の人口が約1万3,500の島に暮らすインドネシアは、約300の民族を率いる多民族国家です。カリマンタン島は、ブルネイ、マレーシアの領土でもあり、両国ではボルネオ島と呼ばれます。

データで見るASIA KAKEHASHI

－2018年度（第1期）～2020年度（第3期）までの調査結果－

アジア高校生架け橋プロジェクトは、留学生のプログラム修了時に受け入れ校・ホストファミリー・留学生の三者を対象に調査を実施しています。交流の満足度や目標到達度を総合的に判断し、サポートやプログラムの改善につなげているほか、帰国一年後調査によって、留学プログラムの中期的な影響も確認しています。

ここでは、2018年度（第1期）から2020年度（第3期）まで3期分の調査結果をまとめ、プロジェクトの「架け橋効果」と「課題」を明らかにします。（割合は小数点2位以下を四捨五入。コロナ禍の影響で2020年度受け入れ校・ホストファミリーの回答率は低くなっています）

調査ダイジェスト（3期分まとめ）

滞在した都道府県

47
（島しょ部：4島）

受け入れ校数

298校
（のべ数）

ホストファミリー

留学生が複数の家庭や閉寮期間中に滞在した家庭数含む
654世帯
（のべ数）

受け入れた留学生数

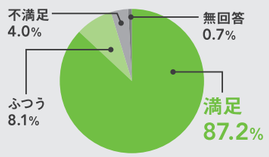
478人
（アジア20か国・地域）

日本の高等教育機関への進学者

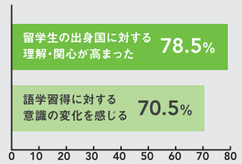
26校 44人
（2022年3月現在。入学内定者含む）

受け入れ校

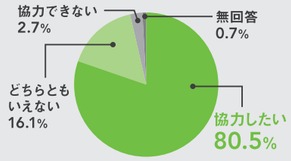
留学生受け入れ体験への満足度



在校生への影響

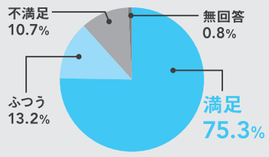


今後の受け入れ

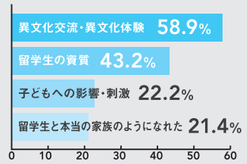


ホストファミリー

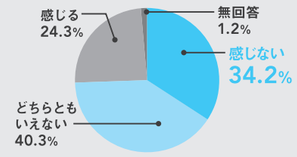
留学生受け入れ体験への満足度



満足の理由

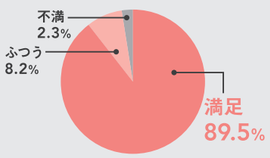


お金の負担感

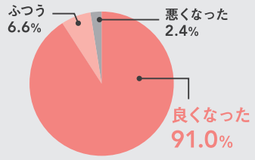


留学生

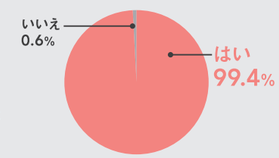
日本の高校生との交流満足度



日本の印象の変化



帰国後、学校や地域で日本を紹介した

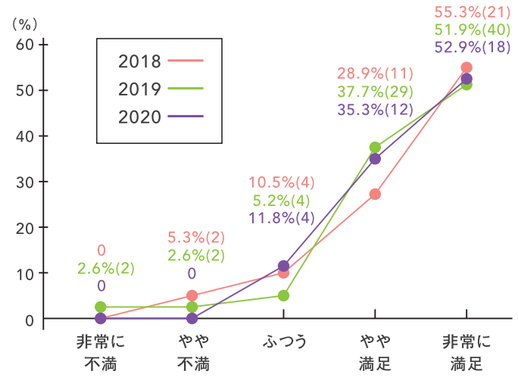


受け入れ校

【調査概要】

年度	2018	2019	2020
回答数(校)	38	77	34
受け入れ校数	69	121	108
回答率	55.1%	63.6%	31.5%

【満足度】

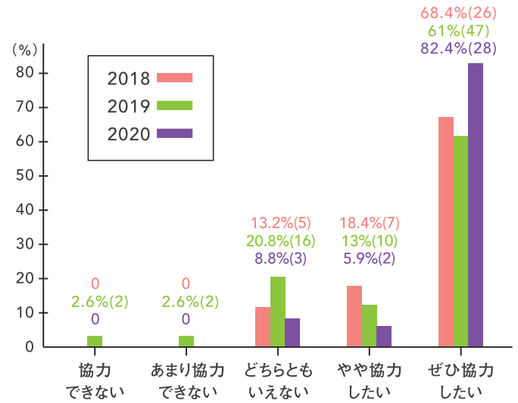


2020年度 無回答＝1（2.9%）

最も多かったのは3年連続で「非常に満足」であり、「やや満足」「非常に満足」を合計すると、受け入れ校の87.2%（3年平均）が留学生に満足しました。

2020年度はコロナ禍により、受け入れ協力校が前年比減となりましたが、生徒への不満は0%でした。

【今後の受け入れ協力】



2020年度 無回答＝1（2.9%）

最も多かったのは3年連続で「ぜひ協力したい」であり、2020年度は82.4%（前年比21.4ポイント増加）でした。

2019年度は、調査時期が新型コロナウイルスの感染第一波と重なりました（2020年3月下旬～4月中旬）。「ぜひ協力したい」「やや協力したい」をあわせると74.0%に留まり、前年比12.8ポイント減少しました。一方、「どちらともいえない」が20.8%で前年比7.6ポイント増加。社会的に感染症への不安が大きい時期だったことが推察されます。

実際、「協力できない」「あまり協力できない」と回答した4校のうち、留学生の受け入れが「非常に不満」と答えたのは1校でした。他3校は、受け入れ満足度が高いものの、「学内でのホストファミリー募集が困難」「今後の見通しが立った時点で改めて検討したい」との理由でした。

翌2020年度には、88.3%の受け入れ校が「ぜひ協力したい」「やや協力したい」と回答し、全国から留学生への期待が高まりました。海外研修はじめ国際交流が中止される中、本事業が体験型のグローバル教育を進める唯一の機会となったことも一因と思われます。

【日本の高校生への影響/留学生の貢献】

影響＼年度	2018	2019	2020
留学生の出身国に対する理解や関心の高まり	71.1% (27)	84.4%(65)	73.5%(25)
語学習得に対する意欲の変化	60.5% (23)	84.4%(65)	50%(17)

2018年度は「はい・いいえ・ふつう」の三択、2019年度は「はい・いいえ」の二択、2020年度は留学生がもたらしたインパクトの上位3つを記述式で、キーワード分類した上で集計しました。異文化理解、語学習得など国際交流以外の自由記述が年々増えているためです。

生徒への影響力として、具体的に「トビタテ!留学JAPANに応募し、カンボジアでボランティアをしたいという生徒が出た」「生徒が自国の文化やアイデンティティについて客観的に考える機会が増え、自ら調べるようになった」「留学生を受け入れた2年間で、海外研修を希望する生徒が0名から42名に激増した」「クラスの約半数が留学に興味を持ち、説明会に参加した」という声が寄せられました。

教職員の変化として、「教員間でイスラム教、ヒンズー教、キリスト教というようなこれまでなかった話題が取り上げられることが増えた」「寮生の食事を担当する人が、宗教によって食事制限があることを勉強し、ハラルのパンを購入するなど異文化理解に努めた」などです。

国際教育推進に向けた体制整備として、2019年度は、「留学生の母校の教員がホストスクールを訪問し、姉妹校・提携校の手続きを検討中である」（愛知県・公立高）、「2018年度、学校寮で初めて留学生を受け入れたことで、教職員の意識が変わった。翌年から学校寮でスポーツ留学生を受け入れる仕組みを構築できた」（京都府・私立高）、「1期生の帰国後、留学生の親が学校を訪問してくれた。日本語学校の校長を務める方だったので、校長と現地を訪問した結果、継続して私費留学生を編入扱いで受け入れることになった」（京都府・私立高）という報告も寄せられました。

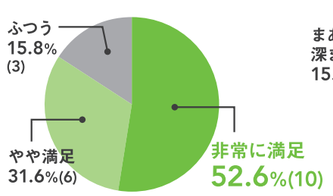
2020年度は、直接「留学生の出身国に対する理解や関心の高まり」に触れた記述は73.5%(25校)に留まりましたが、「国際理解教育推進の取り組みや授業」における生徒の貢献が18校（53.0%）ありました。具体的には、「日本に対する学習意欲や向上を目の当たりにし、在校生は大きな刺激を受けた」「困難な状況であっても、他者や異文化を尊重する気持ちを忘れずに、限りある留学生活の日々を大切に過ごしていた」など、**留学生の積極性が周囲に与える影響、前向きな姿勢が作る雰囲気、団結力**が記述されました。

【オンライン・プログラムの成果】

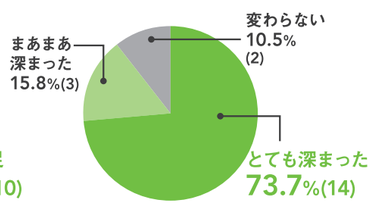
開催時期	2021年2月
回答数(人)	19
参加者数	25
回答率	76.0%

2021年2月、受け入れ校の在籍生を対象に、異文化理解と留学生との交流を深める事業「アジア架け橋 高校生記者交流プログラム」を実施し、全国11校25人が参加しました（詳細はP.21）。
事前学習を経て、留学生にインタビューをし、原稿を書いた生徒の声を紹介します。

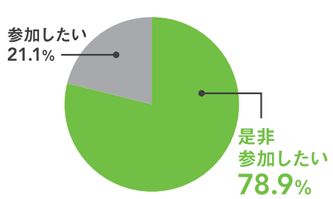
満足度



交流の深まり



また参加したい



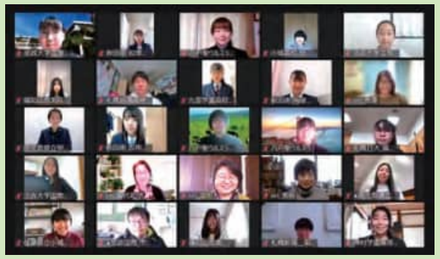
＼ 受講生の声 ／

クラスと階が異なり、学校であまり話せる機会がなかったが、この活動に参加することをきっかけにより積極的に話しかけられるようになったし、留学生の子も名前や顔を覚えてくれて沢山話せるようになった。

普段あまり知ることのできなかったことを取材によって聞くことができた。

留学生のことや、インドについてたくさんのことを知ることができ、また、日本についてどう思っているかなどの気持ちも知ることができた。

今まで留学生との交流があまりできていなかったが、今回のプログラムに参加して留学生の本当の姿を見つけることができてとてもうれしかった。



架け橋さんは違うクラスにいたので話す機会が少なかったが、このプロジェクトのおかげで話す機会ができました。

留学生の人と大勢の中で関わることはありましたが、少人数で質問しあったりすることはなかったので関わる機会になりました。また、留学生について知らないことを知れましたし、自分が疑問に思っていたことを聞く機会にもなったため留学生への理解も前より深まった。

知らない事がたくさんあったことに驚きました。これまで普段の生活の中でも質問はしていましたが、より深く知ることができた。

このプログラムは、自校での直接取材（感染状況によりオンライン取材）と、オンラインによる事前講義・ワークと発表で構成されました。一人の留学生との交流を通して、異文化理解力を高める目的で実施しました。結果、インタビューを通して、①留学生と同じクラスではない生徒が交流できた、②日常的な交流では知り得ない留学生の本心が見られた、という点で満足度が高いことがわかりました。

オンラインによる成果発表会では、自校とは異なる出身地や個性のある留学生を取材した他府県の高校生の発表に触れることができ、「自分とは違う他の国の留学生についての発表はとても面白かった」「自分たちとは全く違うインタビュー内容であったり、書き方、話し方、また留学生との交流の仕方が全然違ったので、こういった方法もあるのだな、という新たな気づきが生まれた」「人それぞれだなと思ったし、同じ国から来た子でも全然違うんだなと思えた」など、多くの声が寄せられました。今後、同様のプログラムがあれば参加したいかという問いには、全員が「参加したい」と答え、オンライン学習の成果がみられました。

このオンライン・プログラムは、受け入れ校からのニーズで企画したパイロット・プログラムでしたが、右記4点を実施したことで、体験型の国際交流に付加価値をつける、いわばヴァーチャル・エクスチェンジとしての教育的効果を高める可能性があると考えられます。

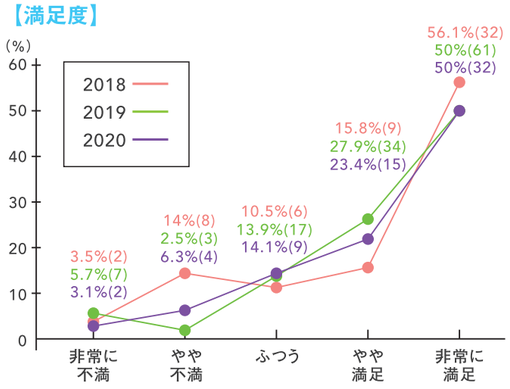
①受け入れ校同士のネットワーク形成（教員・生徒）
②留学生を媒介とするグローバル・コンピテンス向上の実践
③シラバスや教育目標を設定した構造的なオンライン・プログラムの実施
④日英2か国語の認定証発行ニーズ検証（参加生徒の動機づけ）

ホストファミリー

【調査概要】

年度	2018	2019	2020
回答数(家庭)	57	122	64
ホストファミリー数	140	315	199
回答率	40.7%	38.7%	32.1%

【満足度】



2020年度 無回答＝2(3.1%)

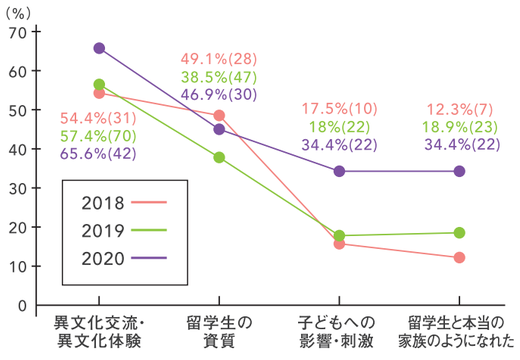
最も多かったのは3年連続で「非常に満足」であり、いずれも50%以上でした。「やや満足」と合わせると、**70%以上のファミリーが、留学生の受け入れに満足**しています。一方で、「非常に不満」「やや不満」を合わせると、不満は17.5%(2018)、8.2%(2019)、9.4%(2020)と一定数あり、サポートの改善が求められる課題であることは間違いありません。

2018年度は、①食事制限のある留学生への対応、②インターネットや電話の長時間利用、③SNSの投稿内容　によって、ファミリーの負担や不満が増えることがわかりました。そこで、2019年度は、以下の改善アクションを行った結果、不満が9.3ポイント減少しました。

①ネットやSNS利用のガイドラインを独自に作成した
②修了生がボランティアとなり、各地の来日前オリエンテーションで情報提供やアドバイスをした
③来日直後のオリエンテーションで、ケーススタディーを強化
④2期生LINEグループで、各国1期生(20人)が"先輩"として参加。日本語学習や適応のアドバイスを行った

2020年度(3期生)は、コロナ禍で留学生の来日が延期されたため、1～2期生約80人がSNSやポッドキャスト等で適応を支援するコンテンツを制作したり、SNSで滞在地域の魅力を伝えたり、日本語指導を実施しました。滞在期間が5か月程度に短縮されましたが、2019年度に引き続き、冬期休暇中の寮生も全員ホストファミリー宅で滞在することができました。

【満足の理由】(複数回答、上位4項目を表示)



最も多かったのは、3年連続で「異文化交流・異文化体験」であり、半数以上のファミリーが留学生の持つ文化や習慣に対して"違いを楽しむ"ポジティブな気持ちがありました。2番目が「留学生の資質」、3番目は「子どもへの影響・刺激」「留学生と本当の家族のようになれた」が続きました。

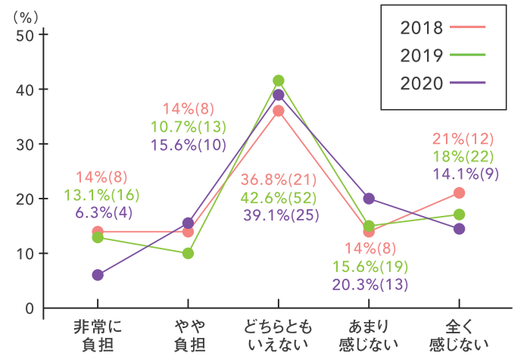
2020年度はどのファミリーも感染予防に気をつけながらの受け入れとなりましたが、ステイホームの効用として「子どもへの影響・刺激」が16.4ポイント増加、「留学生と本当の家族のようになれた」が15.5ポイント増加になりました。

一方、不満足と答えた代表的な理由は、「スマホばかり触っている」「毎日母国へ電話をしている」「部屋に閉じこもってばかりいる」「感謝の言葉がない」「外出の際も車の中でゲームをしている」などが挙げられました。**留学生がオープンな態度で、積極的にホストファミリーとコミュニケーションをとることが大切**だということがわかりました。

【経済的な負担感】

留学生を家族として無償で受け入れる経済的な負担感について、**最も多かったのは3年連続で「どちらともいえない」であり、3年とも40%前後**でした。「あまり感じない」「全く感じない」を合計すると、負担を感じない世帯は、いずれも35%前後でした。

一方で、「非常に負担」「やや負担」を合わせると、28%(2018)、23.8%(2019)、21.9%(2020)でした。負担を感じる世帯は毎年減少しているものの、およそ2割は負担を感じながらも受け入れに協力していることがわかりました。



2020年度 無回答＝3(4.7%)

受け入れの満足度と負担感は必ずしも相関しているわけではなく、「経済的負担は高いと感じた。ホストファミリーへの金銭的サポート(留学生の食事代や光熱費の一部支援等)があれば、継続した受け入れ実施もしていきたい」「お金を出すのは別に構わないが、あまり交流がないまま終わってしまうというのは(ウチはただの安宿なのかという感じで)非常に残念である」「正直、我が家にとって経済的負担は大きかったですが、その分、学んだことも大きかった」「子どもが一人増えるのだから負担が増すのは当然」など、多様な意見が寄せられました。

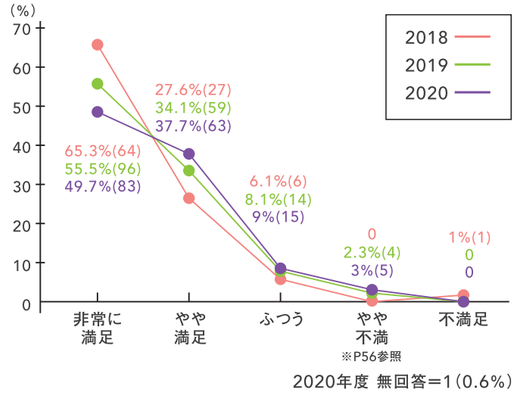
「いろんな場面で体験や時間を共有することは、お互いを理解し合い距離を縮める機会となり、忘れられない大切な思い出にもなります。それぞれのご家庭において負担と満足度がバランス良く両立されることが大切」として、**「双方が留学生活開始前からよりリアルな場面を想像しやすいような内容が、研修やオリエンテーションなどに組み込まれていればなお良い」**という提案もありました。

留学生

【調査概要】

年度	2018	2019	2020
回答数(人)	98	173	167
留学生数	100	200	178
回答率	98.0%	86.5%	93.8%

【日本の高校生との交流】



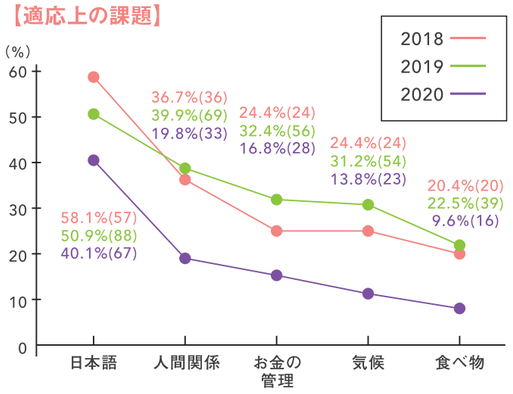
※P56参照

2020年度 無回答＝1(0.6%)

最も多かったのは3年連続で「非常に満足」であり、いずれも約50%でした。「やや満足」「非常に満足」を合計すると、**およそ9割の留学生が日本の高校生との交流に満足**しました。

感染症拡大に伴い、2019年度は約3週間早い帰国となり「友だちにあいさつやお礼が伝えられなかった」留学生も多数いました。2020年度は来日遅延にともない、プログラム期間が10か月から5か月に短縮されました。こうした状況にもかかわらず、両年とも「不満足」は0%で、「やや不満」は2.3%(2019)、3.0%(2020)に留まりました。

【適応上の課題】



※2018年度～2019年度は複数回答。2020年度は択一回答のため、割合が減っている（コロナ禍の適応課題をより明確にするため）

日本に適応する過程で課題だったことは、3年連続で1位は「日本語」、次いで「人間関係」、「お金の管理」でした。

日本語は「慣れるまでに数か月かかった」「（最初は）早口で何を言っているのかわからなかった」「滞在後半には問題と感じなくなっていった」「テキストと話し言葉が違う」など、時間をかけて習得したようです。

人間関係においては、「雰囲気や人々に慣れるまでに時間がかかった」「どんなことに興味があるのか、共通の話題を探していた」など、徐々に人間関係を構築した様子がうかがえました。文化の違いとして「自分を指さして話しているのがわかった」というものもありましたが「心を開き、友だちの中に入って理解しようと努めた」など、さまざまな葛藤や工夫を重ねた留学生もいました。お金については、自国の貨幣価値との違いに戸惑う生徒がいるため、2019年度から留学生に「お小遣い帳」を配布し、物価の把握や金銭管理を身につけるようにしたところ、半数の生徒が「役立っている」と回答しました。

【参考】日本語能力試験 JLPTの受験結果

レベル＼年度	2018	2019
N5	15.4%(4)	55%(60)
N4	46.2%(12)	20.2%(22)
N3	23.1%(6)	14.7%(16)
N2	15.4%(4)	7.3%(8)
N1	ー	2.8% (3)

2018年度は任意受験、2019年度は全員受験とした。

2020年度（3期生）以降は、コロナウイルスの影響で来日遅延となり、申込期間に日本に滞在していなかったため受験しなかった。

2018年度は任意で、2019年度は全員が「日本語能力試験 JLPT*」を受験し、合格率はいずれも55%前後でした。来日4か月目の受験となり、日本語初学者はN4～N5に、学習経験者の多くはN2～N3に挑戦しました。留学生は、国内受験者の認定（合格）率を上回る結果となりました。

2019年度は、留学生全員がJLPTを受験しました。N5は、基本的な日本語をある程度理解することができるレベルとされています。P.55※【日本の高校生との交流】において、「やや不満」と答えた4人のうち3人がN5レベルの不合格者でした。わずかな数ですが、留学生の満足度と日本語運用能力との相関関係が想定できます。

※JLPT:日本語を母語としない人を対象とした語学検定試験で、5段階のレベル（N1～N5）があり、言語知識、読解力、聴解力を測る。年2回、国内外で実施される。

帰国１年後調査

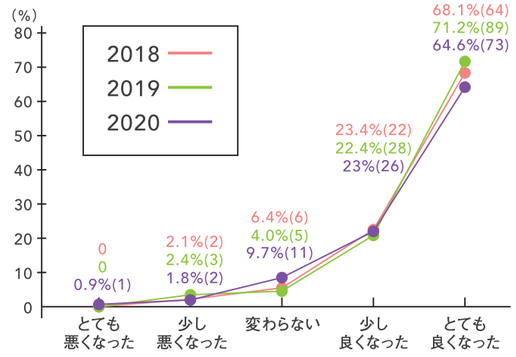
帰国から1年が過ぎ、母国で留学体験を客観的に捉えることができるようになった修了生が、日本とどんな関係を築いているのか、進学状況もあわせて調査しました。

【調査概要】

年度	2018	2019	2020
回答数(人)	94	125	113
留学生数	100	200	167※
回答率	94.0%	62.5%	67.7%

※人道的理由から滞在が延長されたミャンマー生11人は調査対象外とした。

【日本の印象変化】



帰国から一年が経って、**日本の印象が「良くなった」と答えた修了生は91%**でした。主な魅力として記述されていたのは、主に以下5点に分けられます。

人間関係	人の優しさ、学校生活、ホストファミリー、寮生活で出会った人々のよき印象
環境	学校教育、環境・衛生、技術（交通等）、受け入れ地域への愛着
社会性	時間厳守、金銭を含む自己管理、他者への思いやり（迷惑をかけない）
自身の成長	語学やコミュニケーション能力向上、異文化適応能力（食・天候・環境・人間関係）
日本理解	来日前とプログラム体験後で日本への理解が広く深くなったこと

「みんな優しくて何でも自分のことのように手伝ってくれる姿を見てすごく感動しました。相手の気持ちをちゃんと考えてくれる話し方も、とてもいいと思いました」（2期生・韓国）

「とても悪くなった」「少し悪くなった」と答えた修了生について、「少し悪くなった」と答えた修了生は、次のように説明しています。

「広島平和記念公園の訪問や被爆者との平和学習など、プログラム中に体験したことは、世界平和のために働き、それにふさわしい職業に就きたいという志につながりました。滞在中、日本人の方々からたくさんの親切を受け、本当に感謝しています。一方で、肌の色が黒い外国人ということで、かなりの差別にもあったので、日本に対するイメージは少し悪くなりました。でも、プログラムのおかげで、日本の文化や教育制度に慣れ親しみ、言葉も覚えたことから、進学先として他の国ではなく日本を選びたいという気持ちが強くなりました」（3期生・インド）

思い出のなかに一年経ってもつらい経験が残っていることについては、問題が起きた時にすみやかに介入できなかった可能性があり、サポート課題として改善が必要です。アジアの高校生が持つ民族、宗教、言語、文化や習慣の多様性が、受け入れ地域での異文化理解につながるよう、今後も全国各地のボランティアと連携しながらサポートを進めます。

【学校や地域での日本紹介を行ったか】

回答＼年度	2018	2019	2020
はい	98.9%(93)	100%(125)	99.1%(112)
いいえ	1.1%(1)	0%	0.9%(1)

実に**99.4%の修了生が、帰国後に母校、地域、SNS、ビデオ投稿サイト、地元TV・ラジオ・新聞などのメディア、イベント出演によって、「ASIA KAKEHASHI」の意義や日本の高校生活を紹介**しています。年々、SNSやビデオ投稿サイトに日本紹介ビデオを投稿する留学生が増えています。YouTubeで検索ワード“Asia Kakehashi Project”を入力すると、100件以上の関連動画が閲覧できます。10か月で2万6,000回再生されたマレーシア生のビデオや、3年で56万6,000回再生されたインドネシア生のビデオなど、プロジェクトや日本の高校生活を紹介する上で、大きなインパクトを持ち始めています。

「日本留学イベントや日本・カンボジア絆フェスティバルなど、カンボジア国内での大きなイベントへの参加だけでなく、1期生が企画・実施した「Meet with Senpai」イベントを主催しました。自分の高校での体験紹介はもちろん、日本大使館の方と一緒に2つの県に赴き、地域の高校生と交流し体験を伝えました。2期生と3期生の出発前オリエンテーションでは、私たちの経験を伝えました。チラシを配り、お土産を見せ、写真を見せ、架け橋1期生として日本での生活についてプレゼンをしました」（カンボジア・1期生）

【日本語学習の継続】

回答＼年度	2018	2019	2020
はい	72.3%(68)	70.4%(88)	66.4%(75)
いいえ、でも勉強したい	24.5%(23)	27.2%(34)	29.2%(33)
いいえ	3.2%(3)	2.4%(3)	4.4%(5)

【JLPTレベル】

レベル＼年度	2018	2019	2020
なし	30.9%(29)	22.4%(28)	63.7%(72)
N5	17%(16)	25.6%(32)	10.6%(12)
N4	13.8%(13)	23.2%(29)	9.7%(11)
N3	16%(15)	14.4%(18)	4.4%(5)
N2	12.8%(12)	9%(11)	4.4%(5)
N1	6.4%(6)	3.2%(4)	1.8%(2)

無回答 2018年度=3(3.2%)、2019年度=3(2.4%)、2020年度=6(5.3%)

日本語学習は、意識して継続している生徒が約7割います。日本の大学進学を希望する修了生は毎年約3割にのぼり、日本語学習の継続は再来日の要件であると言えます。

【日本で出会った友人と連絡を取り合っているか】

回答＼年度	2018	2019	2020
はい	80.9%(76)	74.4%(93)	85.8%(97)
以前はしていたがいまはしていない	18.1%(17)	25.6%(32)	12.4%(14)
いいえ	1.1%(1)	0%	0.9%(1)

2020年度 無回答=1(0.9%)

平均すると、80.6%の修了生が、帰国1年後も友人との接点を保ち続けています。連絡手段は、LINEなどのチャットアプリやInstagramなどのSNSが主です。

【日本の家族、教師や友人による母国への訪問】

回答＼年度	2018	2019	2020
はい	21.3%(20)	0%	0%
訪問予定あり	23.4%(22)	43.2%(54)	43.4%(49)
いいえ	55.3%(52)	56.8%(71)	55.8%(63)

2020年度 無回答=1(0.9%)

1期生100人のうち、少なくとも20人が、帰国後1年以内に日本からの訪問を受け再会が実現しています。主に、ホストファミリー、教員、友だち(修学旅行を含む)です。ホストファミリーと教員が別々に訪れたというマレーシア生もいました。2019年度(2020年3月帰国)の2期生からは、海外渡航が厳しく制限されたため、実際の訪問には至っていません。

「架け橋効果」を高めるために(課題とアクション)

アジア高校生架け橋プロジェクトは、当初3年目から10か月の年間プログラムになる予定でしたが、残念ながらコロナウイルスの感染拡大により、4期生までセメスター(半年以内)のプログラム実施を余儀なくされました。2022年度(5期生)は、10か月の滞在を予定しているため、特に6か月目以降の長期受け入れの成果検証やサポート強化に力を入れる予定です。

ここでは、留学生活の中心となる学校で、留学生のサポートにあたる教員から寄せられた代表的な意見を挙げ、プロジェクトの目的である「日本人高校生との交流と2国間の架け橋となる人材育成」において、今後何が必要かを考えます。

【日本語】

寮で受け入れる場合、留学生が環境に適応する初期段階で関わる教職員の人数も多くなります。受け入れ校から、「滞在初期は多くの情報を取り入れて理解・適応していくと思う。日本語は、外来語はカタカナ表記であり、街中の看板もカタカナが多い。最低限、ひらがな、カタカナは来日前にマスターした状態で配属してほしい」という声がありました。

留学生が異文化に適応していく心理的プロセスには、言語の使用が大きな役割を果たし、異文化社会への適応と言語能力とは切り離せない関係にあります。AFSでは来日約2か月前に、オンラインの日本語自習サイトを留学生に紹介し自習を促しており、2019年度以降は来日直後の日本語学習にも力を入れてきました。しかしながら、現状では、日本語の基礎を学ぶ環境が身近にない留学生もおり、読み書きの学習到達度に幅があります。

滞在初期は、留学生の友人やホストファミリー・寮からの社会的サポートが欠かせません。そこで、滞在初期の学校・ホストファミリーの負担軽減と、留学生の学習レディネスを高めるため、2022年度は来日前のオンライン語学学習にも力を入れる予定です。

【留学期間】

年間プログラムで来日する留学生を繰り返し受け入れてきた学校からは、「コロナ禍で滞在期間が短くなったのは仕方ないが、半年程度の滞在は、日本のよいところしか見えない。留学生には、そうでないところも見て、一年を通して総合的な経験と理解を深めてもらいたい」「在校生との関係構築や国際的なプロジェクトへの参加を考えると、長期受け入れを希望したい」という声も届いています。

友だちづくりの鍵となる部活動については、「日本との架け橋となる人材を育成するという趣旨であるなら、やはり、日本の四季折々の文化や行事を体験・理解することが大切。その経験が母国での日本紹介でもきっと生きる。日本の高校生との交流も、経験の幅も拡がり、深みも増していく。特に、部活動の練習試合出場や級や免状取得など、年間留学だからこそ到達できる目標がある。「新年度、クラスが留学生受け入れを目的に団結し、来日を待っていた。留学生を仲間の一人として迎え入れ、クラスがいい雰囲気になった」という声も寄せられました。

【グローカルな活動】

特に、地方都市、中山間地域や島しょ部の受け入れケースでは、保育所・幼稚園や小中学校への訪問・国紹介にとどまらない留学生のコミュニティサービス活動が展開されています。留学生の希望や地域ニーズとのマッチングで実現した、グローカルな活動を紹介します。

- 高校に併設された特別支援学校分校で、留学生が教員や生徒と昼食をとり、ビーチ清掃や美化活動を共にするようになった
- 留学生が公共施設でファッションショーや国紹介をした
- 節分などの季節行事で児童と交流した
- 大掃除・正月行事や祭りなどで地域住民と交流した
- 料理教室やカレーパーティーを主宰し、食を通して幅広い世代と交流した
- 地域のNPOの人々と定期的にビーチ清掃をして、プラスチックごみへの関心を高めた
- 老人ホームでボランティアをして、実習生、職員や高齢者と交流した
- 地元のスポーツチームの試合や、スポーツの国際大会でボランティア活動をした
- ホストスクールと出身校を結び、互いの地域や学校紹介を通してオンライン交流をした
- 町やNPO(アイヌ協会)の協力を得て、人権学習ツアーを実施。自国の民族の歴史や文化継承について意見を交換した
- カンボジア出身の生徒が、地雷除去の重機を製造する会社を訪問。現地で地雷除去作業の指導にあたった職員や会長の説明を受け、重機を見学した

今後も、地域での多世代交流や、相互的な学習の場づくりを進め、受け入れ地域全体が異文化交流を体験できるような、モデルケースの実践と蓄積に取り組む予定です。



アイヌ民俗資料館とシャクシャイン記念館(北海道新ひだか町)でアイヌ民族の歴史を学び、文化継承について意見交換を行った(2018年12月)



山陽小野田市中央図書館(山口県)の図書館フェスティバルで、留学生の伝統服のファッションショーを開催。留学生は自国の伝統衣装の説明を日本語で考え、市民を楽しませた(2021年11月)



対人地雷除去機の開発を行う株式会社日建(山梨県南アルプス市)を訪問し、母国カンボジアの地雷除去と、持続的な平和の取り組みを学んだ(2021年12月)

都道府県別受け入れ校数及び人数一覧

都道府県名	2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		合計	
	受け入れ校(校)	受け入れ人数(人)	受け入れ校(校)	受け入れ人数(人)	受け入れ校(校)	受け入れ人数(人)	受け入れ校(校)	受け入れ人数(人)	受け入れ校(校)	受け入れ人数(人)
北海道	4	5	8	20	10	18	14	26	36	69
青森県	1	1	1	1	1	2	1	2	4	6
岩手県	-	-	1	1	1	2	1	2	3	5
宮城県	1	2	3	7	1	1	3	6	8	16
秋田県	-	-	-	-	1	1	1	1	2	2
山形県	-	-	-	-	2	3	2	2	4	5
福島県	1	1	3	4	1	1	1	2	6	8
茨城県	2	3	2	6	1	1	4	6	9	16
栃木県	-	-	-	-	1	6	1	1	2	7
群馬県	-	-	1	1	3	3	2	2	6	6
埼玉県	1	1	2	2	1	1	6	6	10	10
千葉県	1	1	3	3	3	3	3	3	10	10
東京都	4	4	7	7	10	10	15	19	36	40
神奈川県	7	13	15	26	13	20	17	22	52	81
新潟県	1	2	2	3	2	3	4	5	9	13
富山県	1	1	-	-	1	1	-	-	2	2
石川県	1	1	2	2	2	2	2	2	7	7
福井県	-	-	1	1	1	1	2	2	4	4
山梨県	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1
長野県	1	1	5	15	3	6	5	8	14	30
岐阜県	2	3	2	3	2	2	2	2	8	10
静岡県	2	2	4	7	1	1	1	1	8	11
愛知県	5	5	10	12	8	12	13	20	36	49
三重県	1	1	-	-	-	-	2	2	3	3
滋賀県	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
京都府	3	8	4	11	3	11	4	10	14	40
大阪府	4	6	10	15	6	11	14	22	34	54
兵庫県	4	4	6	6	3	4	4	7	17	21
奈良県	1	1	2	2	2	4	6	8	11	15
和歌山県	-	-	2	2	1	1	1	2	4	5
鳥取県	1	1	1	1	2	2	2	2	6	6
島根県	2	2	2	2	1	1	3	4	8	9
岡山県	2	3	2	3	1	2	3	3	8	11
広島県	1	1	3	3	1	1	2	2	7	7
山口県	2	7	2	7	1	6	4	11	9	31
徳島県	-	-	-	-	2	4	2	3	4	7
香川県	1	1	1	1	-	-	-	-	2	2
愛媛県	-	-	2	2	2	2	2	2	6	6
高知県	-	-	1	1	-	-	-	-	1	1
福岡県	3	8	2	12	4	12	5	13	14	45
佐賀県	1	2	2	2	2	2	4	4	9	10
長崎県	1	1	-	-	-	-	1	2	2	3
熊本県	1	1	2	2	-	-	-	-	3	3
大分県	1	2	1	2	1	3	2	3	5	10
宮崎県	2	2	-	-	1	1	1	1	4	4
鹿児島県	1	1	3	4	4	8	4	6	12	19
沖縄県	1	1	1	1	2	3	1	1	5	6
合計	69	100	121	200	108	178	168	249	466	727

架け橋アルバム

留学生の
ベストショットを紹介します。



















大仏も、
みんなのやさしさも、
クール!



YOSAKOIソーラン、
踊れるようになったよ〜



1期生修了式。百人百様の架け橋がいまもアジアに架かっています(2019年2月、文部科学省)



友だちと赤い観覧車に
乗ってん!むっちゃ楽しかったわぁ



ホストファミリーとの時間を
思い出すたび、いまも心が
あったかくなります

お花の先生とは、
今も連絡を取っています!





初めての
お城に大興奮!



友だちと一緒に
出かけた思い出
の一枚です!



2期生、全員集合!
来日直後オリエン
テーション
(2019年8月)



1期生100人、全員集合!民族衣装で首相官邸を訪問しました(2018年8月)

僕の名前はアビヨガです。タピオカではありません(笑)



万全の感染対策で来日(2020年10月)



ありがとう、日本♥

修了生からのメッセージ

事務局に寄せられた修了生の声です。

日本に行く前、私は自分の夢や将来について何も考えていませんでした。しかし、日本に来て日本人と交流するうちに、どの国にも良いところも社会課題もあるのだと意識するようになりました。将来は、大使館で日本と母国との架け橋になったり、NGOで自分の環境や国際的な問題を解決したりと、夢はたくさんあります。このプログラムを続けることは、私たちが考えているほど簡単なことではないことはわかっています。でも、世界に大きなインパクトを与えるために、これからも頑張ってください！　このプログラムのために私に何かできることがあれば、ぜひご連絡ください。（インドネシア・2期）

私は日本が文化や規律だけでなく、もてなしの心や技術も豊かであることを知りました。日本は私に生き方や仕事をやり遂げる方法を教えてくれました。このプログラムは、国籍だけでなく、年齢、性別、肌の色、学年を超えた友情を教えてくれました。日本は、私が生涯忘れることのできない多くのことを教えてくれました。（インド・2期）

日本での生活は、一秒一秒が新しい学びと経験の旅でした。アジア架け橋のおかげで、私は目標を持った人間になり、自分に自信を持ち、真の意味でより良いリーダーになることができました。本当にありがとうございました！これからも私たちのような若者の心を啓発してください。（スリランカ・2期生）

アジア架け橋は、私が今まで経験したことのない機会を与えてくれたプラットフォームです。新しいことをたくさん学び、自分が感じたことをシェアできました。少し大変でしたが、このプログラムは私の人生の中で最高のものでした。たくさんの友人を作ることができ、また、私の小さくてあまり知られていない国のことを、たくさんの人に紹介することができました。私の国ブータンと日本の架け橋になれてうれしいです。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。（ブータン・2期）

架け橋体験のおかげで、視野を広げ、大きく成長することができたと思います。この旅によって、世界はどれくらい美しいか、優しい人間たちはどれくらい多いか、より理解できるようになりました。今の私は昔の私と違い、本当に「グローバル的な市民」になったなーと思います。日本で体験したことと出会えた人々は一生の宝物のようにいつも大事にしたいと思います。アジア架け橋プロジェクトチームと文部科学省、心から感謝しています。よりたくさんのアジアから来た学生が日本で忘れられない体験ができますように頑張ってください！　（ベトナム・1期）

以前は、自分がうまくやれることを仕事にしようと思っていました。でも、異国の地に一人でいると、貧しい国から来た一介の女の子でも何かを変えられるような、特別な力が湧きました。今、私は自分自身や趣味よりも大きなもののために働く準備ができています。多くの人の人生を変えることができるような専攻を学び、世界が直面している問題を解決したい。国と国の間を行き来して、人々に新しいものを届けたいのです。帰国後1年が経ち、架け橋プロジェクトのプロモーションを通して、人に体験を伝えたことで、私は最も重要なことを学びました。"その国に友人がいれば、その国のことを気にかけることができる。" ニュースを見ても、今は、その国の友だちのことを考えるようになりました。他の国に友人を持つことの重要性を理解して、私たちは真の地球市民になれるのだと思います。（カンボジア・1期）

世界中のあらゆる人々が好奇心を抱く日本で、私は、謝ること、感謝すること、生きとし生けるものすべてを大切にすることを学びました。帰国後、よく知られているけれど間違った日本のことや、知られていない真実について話したところ、意外だという反応が返ってきました。（トルコ・3期）

（日本は）みんな優しくて何でも自分のことのように手伝ってくれる姿を見てすごく感動しました。あと相手の気持ちをちゃんと考えてくれる話し方もとてもいいと思いました。大学で日本語学部に行くつもりです！将来に日本で働いてみたい夢を持つようになりました。一生忘れられない温かい思い出を経験させてくださって本当にありがとうございました。（韓国・2期）

「アジア架け橋」は、人生を変えた最高の出来事のひとつです。あがり症で自信もなく、人生の行方もわからなかった16歳の少女が、たった一人で日本へ行ったことをとても誇りに思っています。私だけではなく、多くの人にこのような素晴らしい、人生を変える機会を与え、参加者に成長をもたらしたアジア架け橋チームと文部科学省に本当に感謝します。（マレーシア・2期）

日本語が十分に話せなかったし、漢字を十分に覚えられなかったかもしれませんが、たくさんの人に会って、いろんなことをして、そのすべてがいい経験でした。プログラムの修了後、自分はまだまだ勉強が足りないことがわかったので、将来のために、もっと頑張ります。（タイ・2期）

このプログラムは、私に日本の大学進学を決断させただけでなく、私の残りの人生にずっと影響を与える、貴重な人生の教訓を与えてくれました。それは、忍耐強く、努力を続け、決してあきらめないことです。新しい慣れない環境に身を置くことで謙虚になれましたし、物事が思い通りにいかず、最悪の状況であったとしても、やがて必ず好転することを学びました。（フィリピン・3期）

日本を含めて、アジアの多様な国からの生徒たちのおかげで自分が持っていた偏見を正すことができましたし、いろんなことが経験できて勉強になりました。架け橋体験のおかげで、日本文化を専門的に学んでみたいと思うようになりました。機会があれば、今通っている大学の姉妹校である日本の大学に交換留学したいと考えています。（韓国・1期）

日本での経験を周囲に伝え始めたら、多くの人々が"自分も日本に行ってみたいんだ"と告白し、私の話に興味を示しました。正直、友だちや親族が、これほど日本を好きだったなんて、思いもよりませんでした。この機会をくださったことに心から感謝しています。このプログラムが私の人生にもたらした影響は、永遠に私の心の中に残るでしょう。（バングラデシュ・3期）

私はいつも架け橋チームと文部科学省に、私がどれだけ喜んでいるかを知らせたいと思っていました。今がその時です。私はただのばかげた普通の女の子でした。帰国後、自分がどれだけ変わったかに気づきました。私の家族や友人は、私が前より時間厳守で賢くなったことに驚いていました。（中略）今は、チャンスが来るまで待つのではなく、自分から見つけるべきだとわかっています。まだ学生に過ぎませんが、一人の女の子が（リーダーとして）どのように変わったかを、いつか皆さんに示せたらと願っています。ありがとうございました。（モンゴル・2期）

アジア架け橋は、日本について、世界について（SDGs）、そして自分自身への理解を深めた私に、日本語と日本文化を教える教師になることを決めさせました。日本人はとても親切で、ぜひまた日本で勉強したいと思っています。日本の大学奨学金をと考えていますが、もし奨学金がもらえなかったら、タイの日本語学部で学士号を取得してから、日本で修士号を取得しようと思っています。（タイ・3期）

AFSについて

AFSは異文化学習の機会を提供する世界的な教育団体です。
活動の起源は第一次・第二次世界大戦中に傷病兵の救護輸送をしたボランティア組織American Field Service（アメリカ野戦奉仕団）にあります。
現在は、55のAFS加盟組織と116の交流国で、
理念に共感し活動を共にする5万人以上のボランティアとともに、
多様な文化・価値観の人々と「共に生きることを学ぶ」活動を継続しています。
2015年にUNESCOのオフィシャルパートナー（consultative status）として認められ、
地球市民教育の推進のため、協同イベントなどさまざまな取り組みも行われています。

AFSの理念

AFSの目的

AFS は国際的なボランティア団体であり、営利を目的としない民間の組織である。
より公正で平和な世界の実現に必要な知識、能力、理解力を多くの人びとが身につけるため、さまざまな異文化と接する機会を提供することを目的とする。

AFSの基本的価値観と立場

多様性に満ちた世界において、平和と相互理解の推進のため行動する、責任ある地球市民を育てようとAFSは考える。平和は常に、不正、不公正、偏狭な心によって脅かされる危ういものだと認めるからである。
AFSはすべての個人すべての国と文化に、それぞれの尊厳と価値があると確信し、その考えが広く確立されるよう努力する。そして、人種、性、言語、宗教、社会的地位の違いとは無関係に、人権と基本的自由が尊重されるよう、その実践を推進する。
AFS活動は人間の尊厳、違いの尊重、調和、感受性、寛容の精神という基本的価値観に基づいて行われる。

-1993年開催　AFS世界会議で採択

わたしたちの活動は、留学生を受け入れて異文化との共生を実践しておられるホストファミリーや受け入れ高校のみなさま、みなさまの異文化体験を支える各地のボランティア、AFSの理念に共感してくださる個人や法人・団体からのご支援によって支えられています。